

第6章 学校時代のキャリア教育と学校生活・家庭生活との関連

1. 学校時代のキャリア教育の評価と学校生活との関連

本章では、学校時代のキャリア教育と学校生活および家庭生活との関連を検討する。

図表6-1に、中学時代の学校生活と中学校時代のキャリア教育に対する評価との関連、および高校時代の学校生活と高校時代のキャリア教育に対する評価との関連の2つの表を示した。表に示したとおり、総じて言えば、中学時代、高校時代のいずれの場合も、学校に適應的であり、学校生活をポジティブに送ったとする回答者の方が、学校時代のキャリア教育に対する評価も高かった。特に、「相談に乗ってくれる先生がいた」という項目は、中学・高校時代に共通して、キャリア教育を「覚えていますか」「役立っていますか」どちらの質問項目とも高い相関係数がみられた。親身になって相談に乗ってくれる教員がいたという記憶が、学校卒業後に振り返ったキャリア教育の評価とかなり密接に関連していると言える。一方で、「学校を休みがちであった」「いじめられたことがあった」などのネガティブな学校時代の記憶はキャリア教育に対する評価と統計的に有意な関連がみられないか、関連があったとしてもあまり相関係数が大きくなかった。これらの記憶は、キャリア教育の評価とは直接は関連しないと解釈しておくことができる。

図表6-1 中学時代の学校生活と中学校時代のキャリア教育に対する評価との関連(左)および高校時代の学校生活と高校時代のキャリア教育に対する評価との関連(右)

中学時代	将来の進路や職業について学習したこと 覚えていますか 役立っていますか		高校時代	将来の進路や職業について学習したこと 覚えていますか 役立っていますか	
好きな先生がいた	.153	.156	好きな先生がいた	.184	.193
相談に乗ってくれる先生がいた	.188	.233	相談に乗ってくれる先生がいた	.218	.229
学校を休みがちだった	-.017	-.034	学校を休みがちだった	-.102	-.097
家で勉強をよくした	.162	.136	家で勉強をよくした	.210	.169
友人が多かった	.169	.143	友人が多かった	.180	.170
いじめられたことがあった	.012	-.016	いじめられたことがあった	.003	.005
部活動を一生懸命していた	.107	.118	部活動を一生懸命していた	.161	.157
学校は楽しかった	.129	.147	学校は楽しかった	.188	.193
※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。各列で最も値の大きな相関係数を太字にした。			※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。各列で最も値の大きな相関係数を太字にした。		

図表6-2には、最後に通った学校の学校生活と中学・高校時代のキャリア教育に対する評価との関連を示した。最後に通った学校の学校生活なので、大卒者は大学が、高卒者は高校が該当する。大卒者にとっては大学での生活が、高卒者にとっては高校での生活どのようなものであった場合、中学・高校時代のキャリア教育を覚えている、役立っていると答えるのかを検討したものである。なお、大卒者・高卒者を分けて分析しても、全体的な傾向はほとんど変わらなかったため、図表6-2には、様々な最終学歴の回答者を1つにまとめた分

析結果を示した。表の結果から、最後に通った学校の学校生活についても、おおむね適応的な学校生活を送った回答者ほど、学校時代のキャリア教育に対する評価が高いことが示される。特に、大きな相関係数が観察されたのは、中学・高校に共通して「就職活動や就職試験・進学のための勉強を熱心に行った」という項目であり、この項目に肯定的に回答したもののほど中学・高校時代のキャリア教育を覚えている、または役立っていると回答していたことが示される。

図表6-2 最後に通った学校の学校生活と中学・高校時代のキャリア教育に対する評価との関連

最後に通った学校での生活	将来の進路や職業について学習したこと			
	【覚えていますか】		【役立っていますか】	
	中学時代	高校時代	中学時代	高校時代
友人をたくさんつくった	.140	.157	.137	.155
アルバイトに打ち込んだ	.048	.022	.024	.005
学業に熱心に取り組んだ	.168	.229	.140	.198
部活・クラブ・サークル活動に熱中した	.100	.129	.108	.113
就職活動や就職試験・進学のための勉強を熱心に行った	.209	.280	.224	.280
ボランティア活動に打ち込んだ	.188	.172	.206	.202
自分ひとりの時間をたくさんもった	.016	.011	-.027	-.038

※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。各列で最も値の大きな相関係数を太字にした。

2. 中学時代の学業成績と学校時代のキャリア教育の評価との関連

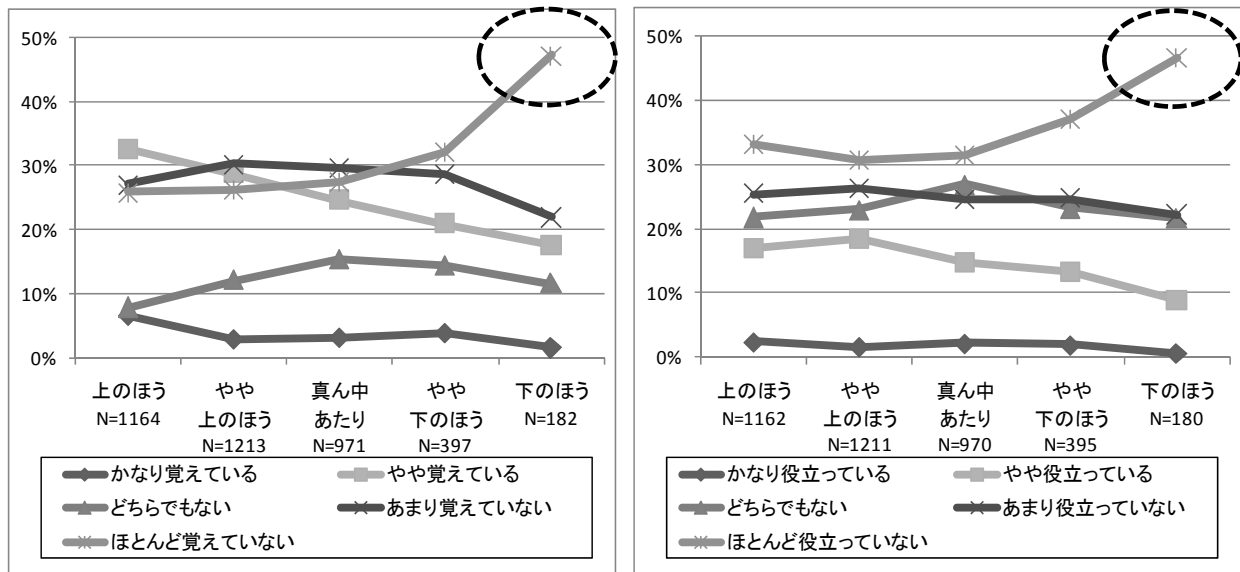
図表6-3には、中学校時代の学業成績と学校時代のキャリア教育の評価の関連を示した。表から、中学時代の学業成績は中学時代のキャリア教育の評価と結びついているが、高校時代のキャリア教育とは関連が薄いことが示される。

図表6-3 中学時代の学業成績と学校時代のキャリア教育の評価との関連

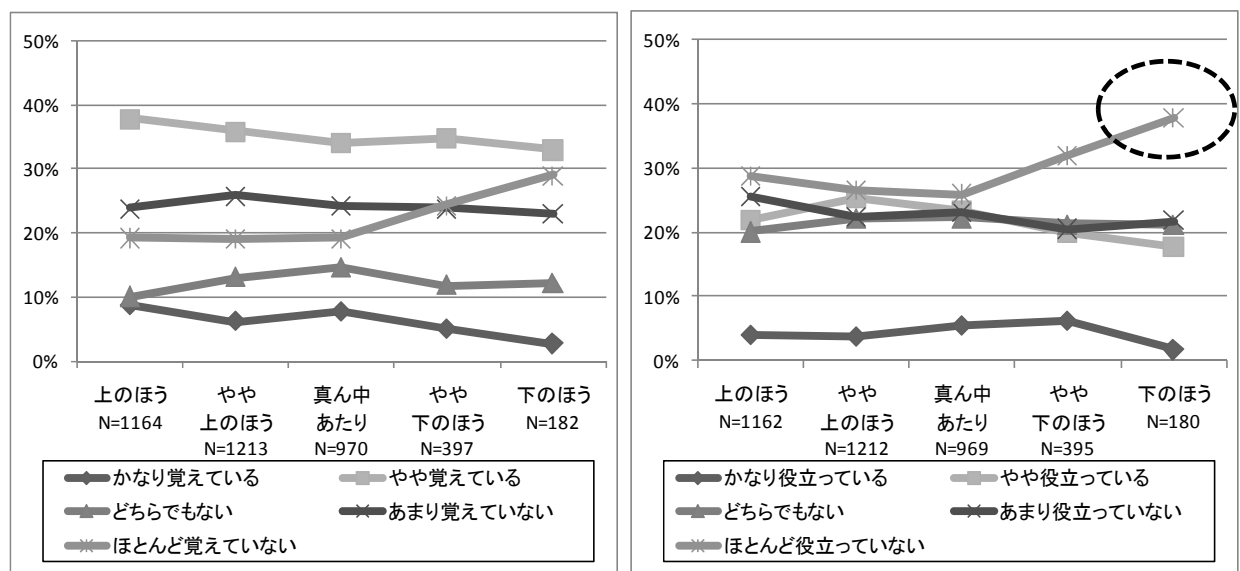
中学時代の成績	将来の進路や職業について学習したこと			
	中学時代		高校時代	
	覚えて いる	役立つ ている	覚えて いる	役立つ ている
中学時代の成績	.100	.053	.036	-.001

※数値は順位相関係数。1%水準で有意な相関係数を網かけにした。

図表6-4および図表6-5には、中学時代の学業成績別にみた中学時代・高校時代のキャリア教育の評価を示した。特に、学業成績が「下のほう」と回答した者で、中学時代のキャリア教育の評価が低いのが分かる。



図表6-4 中学時代の学業成績別にみた中学時代のキャリア教育の評価



図表6-5 中学時代の学業成績別にみた高校時代のキャリア教育の評価

図表6-6には、中学時代の学業成績別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。概して言えば、成績が「上のほう」の者は、中学時代、大学時代の授業や行事をよく記憶しており、成績が真ん中より「下のほう」の者は高校時代のことをよく記憶していた。

ここまでの結果をまとめると、中学時代の学業成績が高いほど中学時代のキャリア教育の評価が高いといった若干関連はみられるがそれほど密接なものではなかった。むしろ特徴的なのは、中学時代の学業成績について「下のほう」と回答した若者であり、特にキャリア教育に対する評価が低かった。また、キャリア教育に関する個別の授業や行事に関して言えば、中学時代の学業成績が「上のほう」「やや上のほう」の者にとっては、大学時代のキャリア教

育が、それ以外の者にとっては中学・高校時代のキャリア教育が特に記憶に残る傾向がある
 ということを指摘できる。

図表6-6 中学時代の学業成績別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

		上のほう N=1166	やや 上のほう N=1213	真ん中 あたり N=972	やや 下のほう N=397	下のほう N=182
中学	職業や仕事を調べる授業	34.9%	32.2%	27.6%	26.2%	28.6%
	ボランティアなどの体験活動	34.3%	33.3%	28.1%	32.2%	25.8%
	進路に関する二者面談や三者面談	74.2%	67.7%	65.5%	62.5%	58.2%
高校	職業興味や職業適性などの検査	28.2%	33.9%	36.4%	38.0%	37.9%
	職業や仕事を調べる授業	16.6%	21.6%	25.7%	25.4%	25.8%
	職業人や地域の人に仕事の話や話を聞く授業	12.1%	15.1%	17.5%	17.6%	15.9%
	職場体験学習やインターンシップ	6.7%	11.0%	15.9%	15.4%	18.7%
	進路に関する二者面談や三者面談	81.6%	82.4%	80.5%	74.8%	68.7%
	履歴書の書き方や面接試験の練習	13.8%	22.1%	35.0%	40.3%	40.7%
	就職活動の進め方や試験対策の授業	10.5%	13.9%	22.8%	23.2%	24.7%
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	8.1%	14.3%	19.2%	21.7%	23.6%
	労働法(働くことに関する法律)に関する授業	5.3%	7.1%	10.4%	8.3%	12.1%
	大学	職業興味や職業適性などの検査	44.4%	47.1%	42.8%	39.8%
自分の性格を理解するための検査		45.6%	46.2%	38.1%	36.3%	30.2%
職場体験学習やインターンシップ		34.0%	33.0%	27.3%	25.2%	22.0%
進路に関する個別相談やカウンセリング		27.5%	33.2%	27.6%	28.2%	22.5%
履歴書の書き方や面接試験の練習		44.8%	53.3%	47.5%	45.6%	36.8%
就職活動の進め方や試験対策の授業		47.9%	53.8%	47.3%	42.1%	37.9%
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業		28.7%	35.4%	34.9%	31.0%	29.7%
労働法(働くことに関する法律)に関する授業		21.1%	24.2%	20.3%	20.2%	13.2%

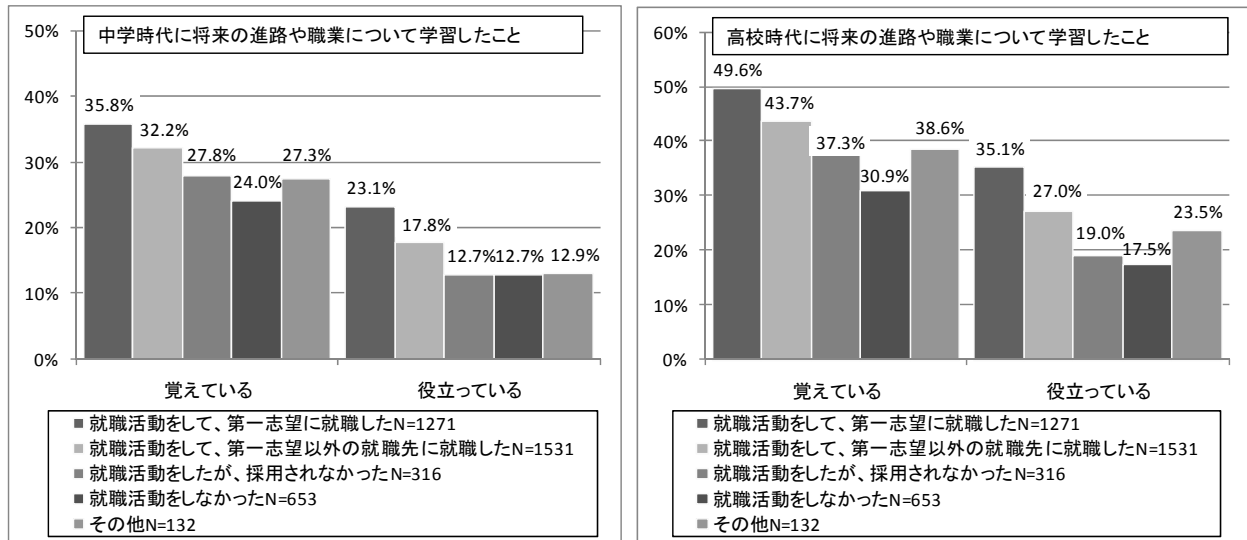
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

3. 学校卒業時の就職活動と学校時代のキャリア教育の評価との関連

図表6-7は、学校卒業時の就職活動別に学校時代のキャリア教育の評価を図示したものである。「中学校時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えている」「役立っている」割合ともに「就職活動をして、第一志望に就職した」者が最も高く、以下「就職活動をして、第一志望以外の就職先に就職した」「その他」が続いていた。また、「中学校時代に将来の進路や職業について学習したこと」を「覚えている」「役立っている」割合も同様であり、いずれも「就職活動をして、第一志望に就職した」者が最も高く、以下「就職活動をして、第一志望以外の就職先に就職した」「その他」が続いていた。以上の結果から、学校時代のキャリア教育の評価は、就職活動を行ったか否か、また就職活動で希望どおりの就職先に就職できたか否かと関連していることがうかがえる。

ちなみに、本調査のこの項目における「その他」では自由記述を求めているが、その内容を見ると、その多くが「内定をもらったが、辞退した」「第一志望に内定したが、就職しなかった」「就職活動をし、採用されたが入社しなかった」などのように、就職活動をして内定をもらったが就職しなかったというものであった。その理由は、結婚や学校中退、病気など様々であったが、いずれにしても「その他」は就職活動をして内定をもらった者に近い特徴をもつ若者であったと考えられる。なお、それ以外に「その他」には「知り合いを通じて就職」

「親せきに頼んだ」「アルバイト先に就職した」のように、知人や親・親戚、アルバイト先など、何らかの縁故による就職者も比較的多く含まれていた。



図表6-7 学校卒業時の就職活動別の学校時代のキャリア教育の評価

図表6-8は、学校卒業時の就職活動別に、学校時代に行った授業や行事で記憶にあるものを示した。「就職活動をして、第一志望に就職した」者は、中学時代の「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」、高校時代の「履歴書の書き方や面接試験の練習」「就職活動の進め方や試験対策の授業」「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」が記憶にあると回答していた。一方、「就職活動をして、第一志望以外の就職先に就職した」者は、「進路に関する二者面談や三者面談」の記憶があるとの回答が多かった。「就職活動をしなかった」者、「その他」の回答者は中学時代の「職業興味や職業適性などの検査」「自分の性格を理解するための検査」など自己理解に関わる授業の記憶があるという回答が多かった。

図表6-8 学校卒業時の就職活動別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

	就職活動をして、第一志望に就職したN=1271	就職活動をして、第一志望以外の就職先に就職したN=1531	就職活動をしたが、採用されなかったN=316	就職活動をしなかったN=653	その他N=132
中学					
職業興味や職業適性などの検査	17.8%	18.2%	16.8%	24.0%	29.5%
自分の性格を理解するための検査	20.5%	20.2%	20.9%	26.3%	28.8%
履歴書の書き方や面接試験の練習	11.9%	9.0%	13.0%	13.3%	16.7%
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	7.6%	4.0%	3.5%	7.2%	9.1%
高校					
進路に関する二者面談や三者面談	80.6%	82.6%	80.4%	73.5%	84.1%
履歴書の書き方や面接試験の練習	30.4%	21.4%	25.0%	25.4%	28.8%
就職活動の進め方や試験対策の授業	19.4%	13.9%	15.8%	17.0%	17.4%
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	17.2%	12.4%	15.8%	15.9%	12.1%

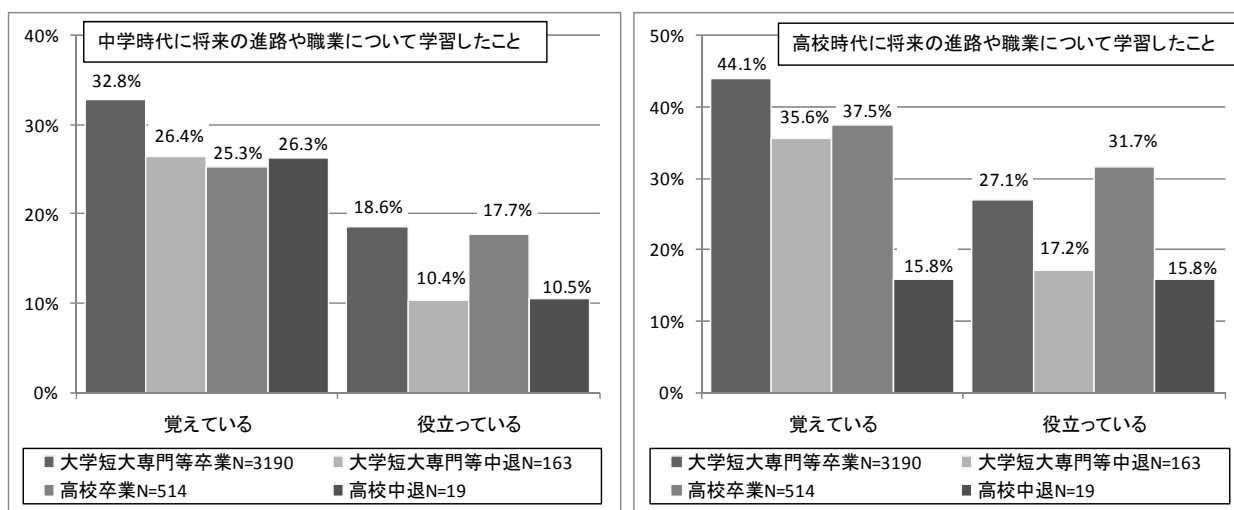
※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所を下線を付した。

概して言えば、就職活動をして自分の希望どおりに就職先が決まった者は、履歴書の書き方、就職活動の進め方、コミュニケーションやマナーなど、実際の就職活動に直接関連が深いような授業をよく記憶していたということができよう。一方で、就職活動をしなかった者では職業興味や性格など自己理解に関わる授業をよく記憶していたと言える。

4. 中退の有無と学校時代のキャリア教育の評価との関連

図表6-9では、学校の中退の有無とキャリア教育の評価との関連を検討した。図表6-9のうち、統計的に有意な差がみられた結果は以下のとおりである。①中学のキャリア教育を大学短大専門学校卒業者は覚えている割合が高く、高校卒業者は覚えている割合が低い。②高校のキャリア教育を大学短大専門学校卒業者は他に比べて覚えている割合が高い。③高校のキャリア教育を高卒者は役立っていると考えている割合が高く、大学短大専門学校中退者は役立っていると考えている割合が低い。

上記の結果を集約すれば、学校時代のキャリア教育を覚えているのは高卒よりは大卒以上、キャリア教育が役立ったと考えているのは学校中退者ではなく学校卒業者であると言える。



図表6-9 最後に通った学校の中退の有無別にみた学校時代のキャリア教育の評価

図表6-10では学校の中退の有無別に学校時代に行ったキャリア教育のうち記憶があるものを示した。大学短大専門学校卒業者は、大学等の授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。一方で、高校卒業者は高校の授業や行事が記憶にあると回答する割合が高かった。ここで重要な結果は、高校中退者であり、中学時代の授業や行事が記憶に残っていると回答した割合が高かった。特に「就職活動の進め方や試験対策の授業」「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」「労働法（働くことに関する法律）に関する授業」など、就職や就労に直結する内容を記憶に残っているとしていた。高校中退者にとって、これらの事がらを学ぶ機会は中学しかなく、改めて、中学時代のキャリア教育の重要性を指摘できる。

図表6-10 最後に通った学校の中退の有無別にみた学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

	大学短大 専門等 卒業 N=3190	大学短大 等中退 N=163	高校卒業 N=514	高校中退 N=19
中学				
職場体験学習やインターンシップ	25.2%	27.6%	32.5%	42.1%
履歴書の書き方や面接試験の練習	10.2%	18.4%	14.8%	21.1%
就職活動の進め方や試験対策の授業	4.0%	4.3%	6.8%	21.1%
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	5.5%	6.7%	7.2%	26.3%
労働法(働くことに関する法律)に関する授業	3.2%	4.3%	3.9%	31.6%
高校				
職業興味や職業適性などの検査	31.6%	34.4%	46.1%	15.8%
職業や仕事を調べる授業	19.7%	25.8%	33.3%	21.1%
職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業	14.1%	12.9%	21.8%	5.3%
職場体験学習やインターンシップ	9.3%	15.3%	24.3%	5.3%
進路に関する二者面談や三者面談	81.6%	76.7%	74.9%	31.6%
履歴書の書き方や面接試験の練習	19.9%	26.4%	60.5%	10.5%
就職活動の進め方や試験対策の授業	12.5%	15.3%	42.2%	0.0%
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	12.2%	12.9%	31.7%	5.3%
労働法(働くことに関する法律)に関する授業	6.3%	11.0%	14.8%	15.8%
大学				
職業興味や職業適性などの検査	53.0%	16.0%		
自分の性格を理解するための検査	51.0%	16.6%		
職業や仕事を調べる授業	25.6%	11.7%		
職業人や地域の人に仕事の話を聞く授業	21.9%	9.8%		
職場体験学習やインターンシップ	36.3%	17.2%		
ボランティアなどの体験活動	18.4%	9.2%		
進路に関する二者面談や三者面談	21.3%	4.9%		
進路に関する個別相談やカウンセリング	34.9%	11.0%		
進路の目標や計画を考える授業	22.3%	6.1%		
履歴書の書き方や面接試験の練習	57.9%	12.3%		
就職活動の進め方や試験対策の授業	58.5%	16.6%		
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	39.1%	12.9%		
労働法(働くことに関する法律)に関する授業	25.5%	9.2%		

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所に下線を付した。

5. 学校時代に学んだ知識が役立っている程度と学校時代のキャリア教育の評価との関連

学校時代のキャリア教育の評価と特に関連が深かったのは、学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っているか否かであった。図表6-11に示したとおり、比較的大きい値の相関係数がみられている。

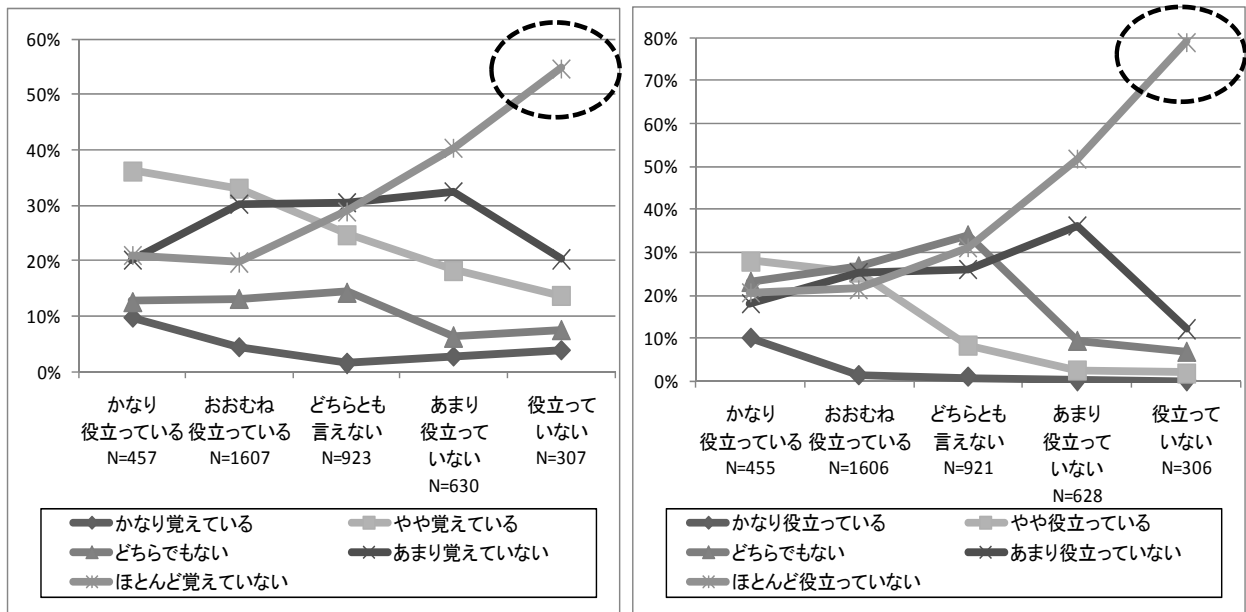
図表6-11 学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っているか否かと
学校時代のキャリア教育の評価との関連

	将来の進路や職業について学習したこと 【覚えていますか】 【役立っていますか】			
	中学時代	高校時代	中学時代	高校時代
学校時代(小学校～最後に通った学校までを通して)に学んだ知識は、今の仕事に役立っていますか	.246	.397	.308	.446

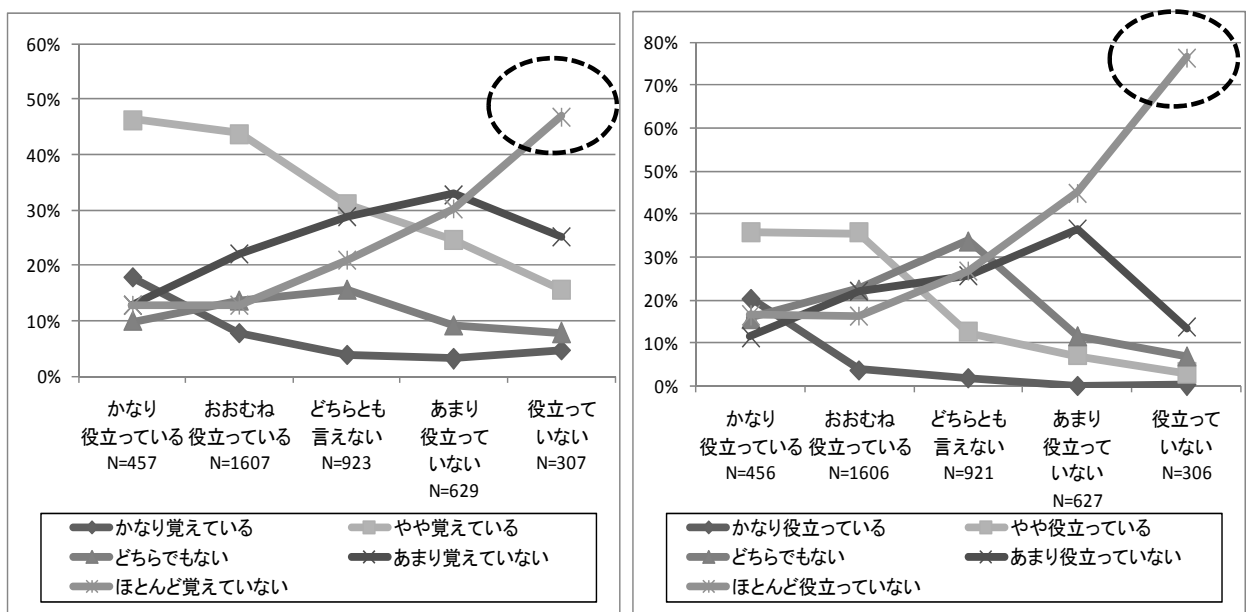
※数値は順位相関係数。全て1%水準で有意な相関係数。

図表6-12および図表6-13には、学校時代に学んだ知識が役立っている程度とキャリア教育に対する評価の関連をグラフに示した。全般的に学校時代に学んだ知識が役立って

いると考えている者ほど、学校時代のキャリア教育を覚えているまたは役立っていると回答する割合は高い。ただし、先に図表6-4および図表6-5に示した学業成績と学校時代のキャリア教育の評価との関連と傾向が似ており、むしろ、学校時代に学んだ知識が「役立っていない」と回答した者で、特に学校時代のキャリア教育に対する評価が厳しいことが分かる。



図表6-12 学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っているか否かと
中学時代のキャリア教育の評価との関連



図表6-13 学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っているか否かと
高校時代のキャリア教育の評価との関連

学校時代に学んだ知識と学校時代のキャリア教育の評価が、相互に密接に関連している様子は、中学時代から大学に至る個別の授業や行事の記憶の面でも明らかであった。図表6-14に示したとおり、学校時代に学んだ知識が今の仕事に「かなり役立っている」と回答した者が、学校時代のキャリア教育を高く評価していた。

ここまでの結果から、学校時代のキャリア教育が高く評価されるためには、そもそも学校時代に学んだ知識と現在の仕事の間には何らかの連なりが意識されている必要があることを指摘できるであろう。学校時代に勉強したことが学校卒業後の仕事を結びつくからこそ、キャリアに対する意識面での働きかけであるキャリア教育を有益なものとして考えることができる。学校時代に将来の職業に結びつく具体的な知識や技術を学んでおくことの必要性・重要性を示唆する結果としても解釈できる。

図表6-14 学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っているか否かと
学校時代に行った授業や行事で記憶にあるもの

	かなり役立っている N=457	おおむね役立っている N=1608	どちらとも言えない N=924	あまり役立っていない N=631	役立っていない N=307
中学					
職業や仕事を調べる授業	38.9%	32.6%	29.7%	26.9%	23.8%
職業人や地域の人に仕事の話や話を聞く授業	38.7%	32.2%	30.0%	30.9%	22.8%
ボランティアなどの体験活動	36.3%	33.5%	31.6%	29.2%	23.1%
進路の目標や計画を考える授業	26.0%	18.9%	18.8%	16.0%	14.3%
高校					
職業興味や職業適性などの検査	39.2%	35.0%	31.4%	31.9%	26.4%
職業人や地域の人に仕事の話や話を聞く授業	19.9%	15.9%	14.5%	12.8%	10.1%
ボランティアなどの体験活動	26.3%	20.7%	18.4%	18.1%	18.2%
進路に関する二者面談や三者面談	84.2%	81.7%	78.8%	79.6%	72.6%
進路に関する個別相談やカウンセリング	48.8%	42.9%	42.0%	36.0%	32.6%
進路の目標や計画を考える授業	40.0%	35.1%	28.6%	27.9%	20.2%
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	19.7%	16.2%	13.2%	12.0%	10.4%
大学					
職業興味や職業適性などの検査	45.7%	47.5%	40.8%	43.6%	31.6%
自分の性格を理解するための検査	47.5%	45.8%	39.1%	39.6%	30.3%
職業や仕事を調べる授業	24.1%	23.5%	20.0%	20.0%	14.0%
職業人や地域の人に仕事の話や話を聞く授業	25.8%	19.2%	16.3%	16.3%	12.4%
職場体験学習やインターンシップ	43.1%	34.0%	26.4%	24.7%	17.9%
ボランティアなどの体験活動	25.4%	17.3%	12.6%	12.0%	7.2%
進路に関する二者面談や三者面談	24.3%	19.8%	15.3%	14.9%	10.1%
進路に関する個別相談やカウンセリング	35.7%	31.7%	26.7%	26.3%	18.9%
進路の目標や計画を考える授業	24.9%	20.5%	16.8%	15.7%	9.1%
履歴書の書き方や面接試験の練習	48.4%	52.7%	46.5%	44.7%	31.3%
就職活動の進め方や試験対策の授業	54.0%	53.0%	47.2%	43.9%	30.0%
コミュニケーションやマナーを学ぶ授業	42.0%	36.0%	31.0%	26.1%	18.2%
労働法(働くことに関する法律)に関する授業	31.5%	23.3%	18.8%	18.4%	10.1%

※全て1%水準で有意。残差分析の結果、統計的に有意に値が大きい箇所を網かけ、有意に値が低い箇所を下線を付した。

6. 家庭生活と学校時代のキャリア教育との関連

図表6-15には、家庭生活と学校時代のキャリア教育に対する評価との関連を示した。家庭生活は「高校生くらいまでの様子を振り返って、家庭生活や家族との関係はどうでしたか」という設問で表にある項目を提示し、「そう思う」から「そう思わない」までの5件法で

回答を求めた。

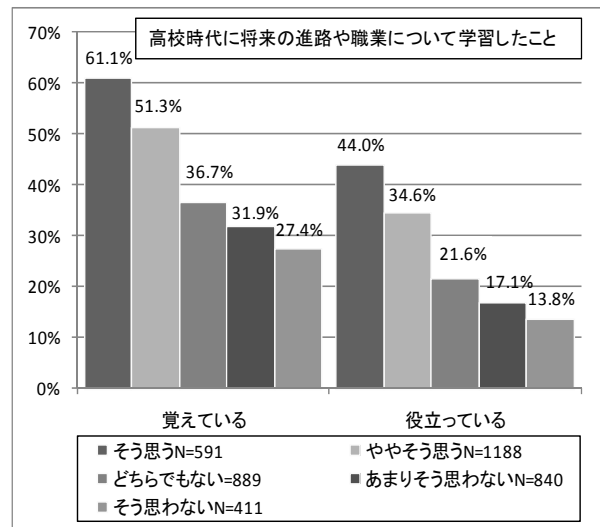
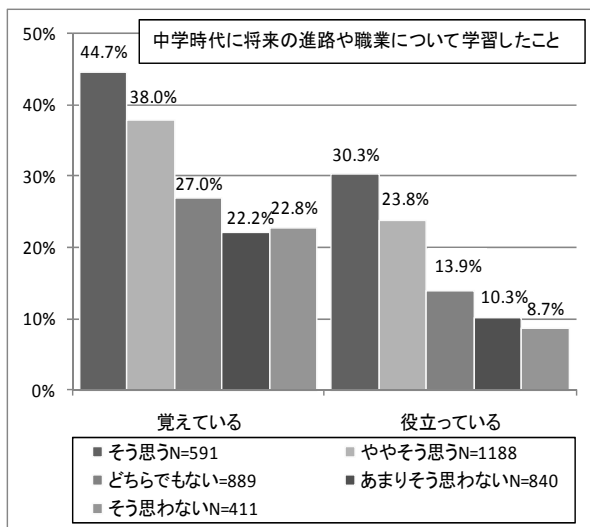
表中の相関係数はほぼ全て 1%水準で有意であり、家庭生活の良好さは学校時代のキャリア教育の評価の高さと関連していた。特に、「学校での出来事などを家族で話し合った」「将来について話し合った」など、家庭内でよく話し合ったか否かはキャリア教育の評価と関連していた。「父親は自分の気持ちをわかってくれた」「母親は自分の気持ちをわかってくれた」という設問も、特に「役立っている」という印象と関わっていた。家庭内で話し合った上で親が自分を理解してくれたか否かがキャリア教育の評価と関連していたと言える。

図表6-16は、特に相関係数の値が大きかった「将来について話し合った」に対する回答別に学校時代のキャリア教育の評価をみたものである。おおむね直線的に強く関連していることが示されている。

図表6-15 家庭生活と学校時代のキャリア教育に対する評価との関連

	中学時代		高校時代	
	覚えて いる	役立つ ている	覚えて いる	役立つ ている
しつけが厳しい方だった	.092	.086	.120	.113
帰宅の門限が厳しかった	.066	.075	.086	.098
家の手伝いをさせられた	.087	.087	.123	.110
学校での出来事などを家族で話し合った	.172	.157	.188	.163
叱られることが多かった	.049	.040	.056	.054
欲しいものは買ってもらえた	.048	.073	.023	.043
親は学校の成績を重視していた	.078	.064	.059	.048
父親は自分の気持ちをわかってくれた	.132	.169	.147	.179
母親は自分の気持ちをわかってくれた	.118	.156	.139	.169
父と母は仲が良かった	.068	.084	.084	.092
家庭の雰囲気が明るかった	.105	.121	.127	.127
将来について話し合った	.220	.251	.264	.274

※スピアマンの順位相関係数。相関係数.043以上は1%水準で有意。 .15以上の相関係数に網かけを付した。



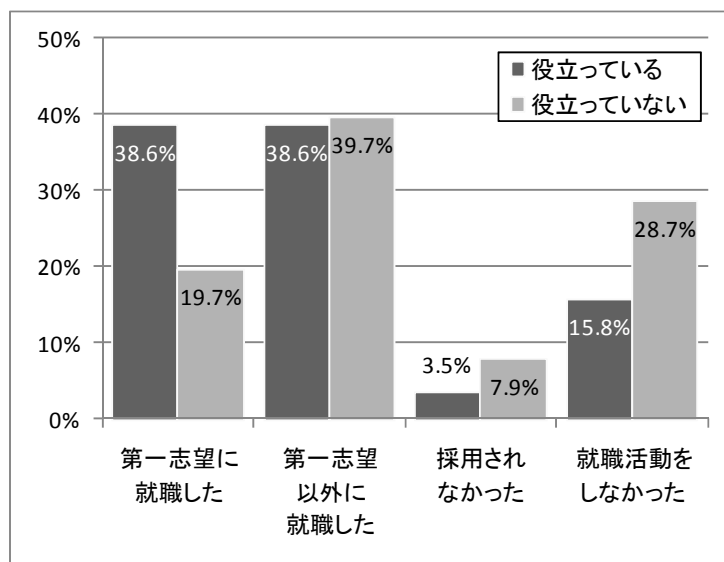
図表6-16 「将来について話し合った」に対する回答と学校時代のキャリア教育に対する評価

図表6-17から図表6-19では、家庭で将来について話し合わなかった若者であっても、仮に学校で適切なキャリア教育を受けて役立っていると感じられれば、その後の進路選択やキャリア形成に良い影響があるのではないかと考え、検討を行ったものである。具体的には、図表6-15で相関係数の値が最も大きかった「将来について話し合った」に対する回答が「そう思わない」であった回答者のみを分析対象とし、高校時代のキャリア教育が「役立っている」か否かで結果が異なるかを検討した。

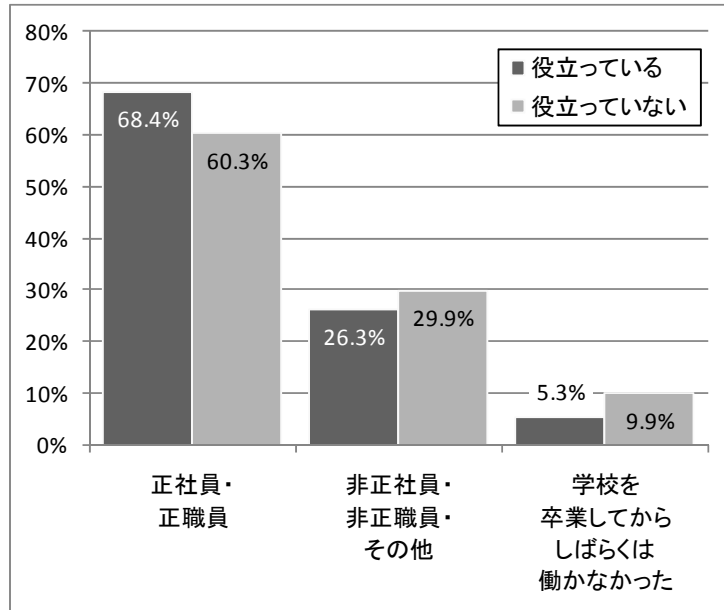
図表6-17では、学校卒業時の就職活動結果との関連をみた。グラフに示されたとおり、家庭で将来について話し合う機会に恵まれなかった若者であっても、高校時代のキャリア教育が役立っていると感じられている場合には「第一志望に就職した」割合が高く、「就職活動をしなかった」割合が低かった。

図表6-18では、学校卒業直後の働き方との関連をみた。同様に、高校時代のキャリア教育が役立っていると感じられている場合には、家庭で将来について話し合わなかった若者でも「正社員・正職員」として働き始めた割合が高く、「非正社員・非正職員・その他」の割合および「学校を卒業してからしばらくは働かなかった」割合は低かった。

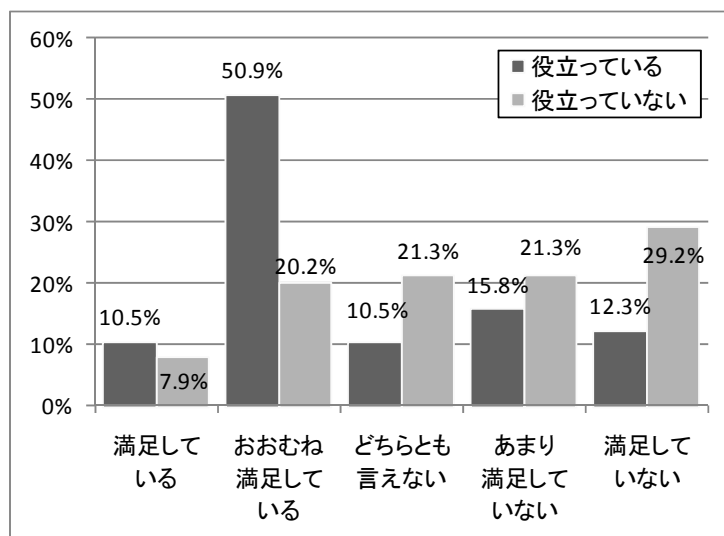
図表6-19では、これまでの職業生活に対する満足感との関連をみたが、高校時代のキャリア教育が役立っていると回答した者は「おおむね満足している」の回答が高いことが示されている。



図表6-17 家庭で将来について話し合わなかった若者における
高校時代のキャリア教育の評価と学校卒業時の就職活動結果の関連



図表6-18 家庭で将来について話し合わなかった若者における高校時代のキャリア教育の評価と学校卒業後の働き方との関連



図表6-19 家庭で将来について話し合わなかった若者における高校時代のキャリア教育の評価とこれまでの職業生活に対する満足感

以上のように、総じて言えば、家庭教育は学校時代のキャリア教育の評価と密接な関連があり、家庭で将来によく話し合い、親に気持ちを分かってもらえたと感じることが、学校時代のキャリア教育の評価の高さに結びついているようであった。ただし、一方で、家庭でそうした話し合うような機会に恵まれなかった場合でも、学校時代のキャリア教育が有益なものであると感じられれば、その後のキャリア形成に良い影響を及ぼす可能性があることもうかがえた。

7. 本章のまとめと示唆

本章では、学校生活・家庭生活と学校時代のキャリア教育との関連を検討した。本章の結果、以下の諸点が示された。

第一に、総じて、学校に適応的であったほど、学校時代のキャリア教育に対する評価が高かった。特に、中学・高校時代においては「相談に乗ってくれる先生がいた」ということがキャリア教育の評価と強く関連していた。

第二に、一方で、学業成績とはそれほど強い関連はみられなかった。強いて言えば、中学時代の学業成績は下の方だったと回答した若者で、極端に学校時代のキャリア教育の評価が低いという結果が目立った。

第三に、就職活動がうまくいった若者、学校を中退しなかった若者、学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っていると感じる若者ほど、学校時代のキャリア教育の評価が高かった。特に、学校時代に学んだ知識とキャリア教育の評価の関連は比較的顕著であり、ここでも、学校時代の知識はほとんど仕事に役だっていないと回答した者で、極端に学校時代のキャリア教育の評価が低いという結果が目立った。

第四に、家庭生活が良好であった者ほど、学校時代のキャリア教育の評価が高かった。特に、「学校での出来事などを家族で話し合った」「将来について話し合った」など、家族で将来について話し合ったという若者で、特に学校時代のキャリア教育の評価が高かった。

これらの結果からは、以下の諸点が示唆される。

第一に、学校に適応的であることは、キャリア教育が効果的であるための必要条件になるということである。この点に関して、表面的には、労働行政に対する直接的な示唆はないように見える。しかし、必ずしも学校に適応的な生徒ばかりではないということを考えた場合、そうした生徒に対しては学校だけでは十分にキャリア教育の効果が及ばないという事態が生じることは十分に想定される。特に、高校中退者を中心に、学校を中退した若者の就労に向けた意識づけや就職のための具体的な支援は、大人になってからの職業紹介その他の形で、労働行政の側で行わざるを得なくなる。すなわち、学校に適応的でなく結果的にキャリア教育から学ぶことができなかつた生徒に対して、いずれキャリア教育的な介入支援を行わなければならないのは労働行政の側であるということになる。このように考えた場合、労働行政のキャリア教育との関わり方として、まずは学校段階におけるキャリア教育に対するいっそう緊密な連携を中心としつつ、学校のキャリア教育で十分に学べなかつた対象層に対して、その分を補填するようなキャリア形成支援を常に用意しておくということが示唆される。本章の結果は、いかなる対象層にいかなる支援を行うべきかを、労働行政に対して、間接的に示唆するものであったと解釈できよう。

第二に、良好な家庭生活がキャリア教育の基盤となっているという本研究の結果も、表面上、労働行政との接点がないように見える。しかし、ワーク・ライフ・バランスがなぜ必要なのかをキャリア教育の視点から捉えた場合、そのバランスを欠いてしまった場合には子ど

もに対するキャリア教育が十分に機能しなくなるからだということが言えるであろう。本章の結果を敷衍すれば、家庭で将来の進路について話し合い、将来に向けて問題意識をもつからこそ、子どもは、学校で教員が取り上げるキャリア教育の内容に関心をもち、そこから多くを吸収することであろう。一方で、学校のキャリア教育で学んだことや職場体験学習などをきっかけに、家庭で将来について話し合うということがあれば、キャリア教育の効果というのは、やはり増大するものでであろう。そうした良好な家庭生活をできるだけ多くの人々に送り届けようというのは、労働行政においても常に大切にしている目標のはずであり、その目標の先に、子どもにとって効果的なキャリア教育があるということを、本章の結果は示唆するものであったと言える。

第7章 学校時代のキャリア教育の自由記述データによる分析

1. 本章の目的

高校時代のキャリア教育の経験を覚えている人の割合は、全体、性別、学歴別に見ても40%前後となっている。この結果は以下の2つの問題を示唆すると思われる。

第一に、職業に関する知識や考え方ではなく、職業生活という観点から見たときに、学校時代のキャリア教育の経験や記憶は他の何かに代替あるいは補完されている可能性があるということである。なぜならば、私たちは学校教育のみならず、様々な他者と出会う中で学習した事柄を現在の生活に意味づけていることも確かであり、職業生活を営んでいる現在の観点から過去を想起する場合、学校時代のキャリア教育ではなく具体的な他者との関係で学んだ事柄が想起されることも考えられるためである。そこで本章では、学校時代のキャリア教育を「キャリア教育」、それ以外の経験による学習を《キャリア教育》として区別し、いかなる経験が現在の職業生活に関係すると想起されるのかを分析する。したがって本章の第1の課題は、どのような経験が想起されるのかを理解するところにある。

第二に、M. Halbwachs (1925=1992, 1950=1989) が、私たちの記憶は現在の観点から再構成されたものであり、過去に経験した出来事を必ずしも想起するわけではないと指摘したように、学校時代の「キャリア教育」の効果や機能を測るとしても、それは回答者の現在の記憶に依存してしまうという問題にかかわる。ライフイベントの中で「最も大きな影響を与えた出来事」として回顧される内容には「職業」が上位にランクされることは知られているように(高橋・岸野, 2001)、「就職」という経験は私たちの人生にとって重要な出来事——転機である。だが、そのような重要な出来事であっても、P. Berger が「すでに起こった出来事を回想し、再解釈し、説明し直すたびに、過去は絶えず変化してゆく。(中略)われわれも自己の生活史を常に再解釈しつづけているのである」(Berger, 1963=1995: 85)と指摘するように、「キャリア教育」が想起されるのか否か、どのように意味づけられるのかは現在の回答者の状況に大きく依存すると考えられる。それゆえに本章の第2の課題は、「就職」という経験が人生の転機としてどのように捉えられているのか、および回答者の現在の状況によって過去の意味づけがどのように異なるのかという点の検討である。

上記の2点を検討するためには、回答者がキャリア教育や過去の経験をどのように捉え、意味づけているのかを理解する必要がある。そこで本章では、小学校や中学校、高校、大学等の学校時代において、現在の職業生活に関係があったと思うことの自由記述データを用いて分析を行う。とはいえ自由記述データの分析結果の最低限の客観性や厳密性を担保するために、樋口耕一氏によって開発されたフリーソフトウェアである「KH Coder」(<http://khc.sourceforge.net/>)を用いて、自由記述にどのような語句が頻出し、その語句が他のどのような語句と関連があるのかといった点に焦点を当てることにした。

2. 対象と課題の設定

本章では、本調査で設定した以下の自由記述を用いる。

- 25-1. 現在の職業生活に良い面、悪い面に関係があったと思うことを、小学生、中学生、高校生、大学生の頃に分けて、何でも自由にご回答下さい。学校の授業、家庭での出来事、友達と遊んだこと、アルバイト、ボランティアなど、何でも構いません。
- 25-2. 25-1. に挙げた出来事のうち、現在の自分の職業生活にもっとも関係のあるものに○を1つだけつけてください。
- 25-3. それが、現在の職業生活にどのように関係があると思うかを以下に自由に記入ください。

上記の意図は、①現在の観点から、学校時代の出来事を想起させ（25-1）、その内、②何が現在ともっとも関係が深いのか（25-2）、③その理由（25-3）を尋ねている点にある。

ここで本章の課題を再度整理する。

（課題1）各時代において現在の職業生活に関係のある事柄として何が想起され、その内容がどのように変容するのか[3,4節]

（課題2-1）現在の職業生活にもっとも関係がある時代はどの時代なのか[5,6節]

（課題2-2）回答者の現在の状況によって過去の意味付けはどのように異なるのか[7節]である。これらの検討を通して、回答者のキャリア教育の意味づけを理解し、「キャリア教育」に何が求められ、また何を必要としているのかという課題の一端を明らかにしたい。

3. 各時代の自由記述において頻出する語句

本節では、25-1.の設問に対する自由記述の回答から各時代における自由記述の全体的な傾向を把握していく。

(1)小学生の頃

小学生の頃の自由記述で頻出する語句（図表7-1）の内、上位4番目までが《キャリア教育》に該当する、「仲の良い友達が出来た」、「協調性が身についた」など【友達】、「勉強を頑張った」「遊んでばかりで勉強しなかった」など【勉強】、「学校での生活で集団におけるコミュニケーションの仕方を学んだ」など【学校】、具体的な授業科目とともに記述される【授業】である。そして5番目に「キャリア教育」に該当する「どんな仕事に就きたいかを調べたこと」など将来の【仕事】が挙げられている。ここから小学生の頃は、基礎的な人間関係を構築する力や将来の目標設定の涵養と関連しているということが理解できる。

図表7-1 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句
(小学生の頃)

友達	424	社会	126	クラス	71	担任	57
勉強	300	興味	107	集団	70	手伝い	56
学校	267	見学	106	遊び	70	ピアノ	56
授業	261	コミュニケーション	99	野球	68	職場	54
仕事	245	小学校	86	基礎	68	ゲーム	52
友人	243	受験	85	学習	67	計算	52
先生	236	中学	83	地域	66	機会	51
自分	208	転校	78	家庭	65	家族	48
生活	171	クラブ	76	話	62	人間	47
関係	160	委員	76	ボランティア	61	行動	47
職業	152	両親	73	父親	61	運動	45
習い事	145	サッカー	72	経験	59		
活動	144	スポーツ	72	体験	58		

(2)中学生の頃

中学生の頃においても、学校生活における出来事が中心的であることは小学生の頃と同様である(図表7-2)。だが頻出する語句を見ていくと、1番目には部活動やボランティア活動の経験である【活動】、次いで、「協調性が身についた」「上下関係が出来た」といった人間関係を維持するためのルールを理解と関わる【部活】が登場するなど変化が見られる。さらに【勉強】については「受験勉強」などいわゆる学力に結びつく勉強に加えて、「部活動で上下関係の厳しさ、大切さなどを学んで勉強になった」などに見られる人間関係の在り方についての勉強といったように意味の膨らみが見られる。これらが《キャリア教育》に該当するのに対し、以下の2つは「キャリア教育」に該当する「自分のやりたい職業の仕事場へ行って、体験した」など【体験】、授業や職業体験など【学校】となっている。

ここから中学生の頃になると、部活動やボランティアなどに参加する機会が増加し、異なる年代の他者との人間関係を構築する術を体得したり、進路選択を迫られる中で進路や職業など自身の将来を見つめるようになってきた頃として位置づけられるといえる。

図表7-2 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句
(中学生の頃)

活動	624	仕事	207	先輩	87	教師	62
部活	570	職場	175	成績	87	話	60
勉強	540	ボランティア	147	進路	86	老人	59
体験	318	受験	146	クラス	84	委員	59
学校	303	生活	131	進学	82	行動	58
関係	302	上下	126	年間	69	後輩	54
授業	275	生徒	118	社会	66	ホーム	50
自分	267	中学	111	コミュニケーション	65	地域	46
先生	248	学習	108	経験	65	忍耐	43
高校	232	英語	94	練習	65	野球	42
職業	229	クラブ	91	努力	64	所属	40
友達	226	人間	90	パソコン	63		
友人	215	興味	88	テスト	63		

(3) 高校生の頃

高校生の頃になると頻出する語句に【アルバイト】が登場するようになり、《キャリア教育》の内容においても、それまでの学校生活中心の記述とは様相が異なってくる（図表7-3）。最も頻出する語句である【勉強】では受験勉強などに加え、「アルバイトが面白くなってしまった為、学生の本分の勉強をしなくなりました」などと学校生活とアルバイトを対比する記述も目立つようになった。それは2番目に頻出する【アルバイト】の自由記述において、接客やマナーの学習に関する記述のみならず、「アルバイトを始めて、リアルな社会勉強が出来た。反面、学校は面倒なだけだった」という記述があることから理解できる。一方で「大学受験」の経験など【大学】、部活やボランティア、生徒会などの【活動】なども語られている。その他、【授業】ではパソコンや英語、職業など具体的な科目名が挙げられており、これが「キャリア教育」に該当していると言える。

以上より高校時代は、さらに活動の幅が広がり、学校生活に関する【活動】と【アルバイト】など直接的に職業生活に関する活動とが両極に布置されるようになった時代であると理解できる。後で検討するが（4,5節）、「進学」か「就職」かという選択に応じて現在の職業生活に関係する事柄が変容することには留意する必要があると思われる。

図表7-3 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句
(高校生の頃)

勉強	706	関係	228	興味	104	相談	68
アルバイト	705	進学	224	資格	102	進学校	66
大学	446	先生	213	クラス	99	コミュニケーション	60
活動	416	進路	191	パソコン	97	努力	58
学校	372	職業	169	理系	96	クラブ	55
部活	355	社会	151	人間	92	文化	55
授業	350	お金	143	年間	87	上下	55
自分	343	生活	131	体験	85	話	55
友人	281	就職	130	成績	84	参加	54
受験	264	ボランティア	128	英語	82	目標	53
友達	242	接客	126	専門	79	数学	53
高校	237	バイト	118	生徒	70		
仕事	234	経験	107	選択	69		

(4) 大学生等の頃

大学生等の頃では高校生の頃と同様、学校生活とアルバイトなどの経験が上位に位置している（図表7-4）。具体的に頻出する語句の自由記述を見ていくと、上位3番目までは《キャリア教育》に該当する「アルバイトをすることで、働くことの楽しさ、厳しさを知った」「アルバイトで人間関係の難しさを改めて感じた」など【アルバイト】、人間関係や、ルール・マナーを学習したサークルや就職活動など【活動】、社会勉強や、資格の勉強、ゼミなどの【勉強】であり、4番目に「キャリア教育」に該当する壁にぶつかったりした就職活動の経験や就職ガイダンスの講座など【就職】などが挙げられている。ここで注目すべきは、これ

らが「アルバイトで社会勉強をし、自分が貢献できることを考えたこと」や自分に向いている職業、自分の強みなど自己理解（【自分】）へ統合されていることである。この点は、大部分の人が就職という選択をする中で、学校生活やアルバイトなどの様々な経験を自己理解へと動員させていく就職活動の経験とパラレルな関係にあるのではないかと推察できる。

以上、時代ごとの自由記述の傾向から理解できることは、時代を追うごとに活動や他者との関わりに多様性を帯びていくこと、高校生や大学生の頃では「就職」との関連が強くなること、「キャリア教育」についても一定の記述が見られるが、現在の職業生活に関係のある出来事の多くは《キャリア教育》の中から選択され、記述されていることである。

図表7-4 現在の職業生活に関係のあったと思うことの自由記述で出現頻度の高かった語句

(大学生等の頃)

アルバイト	1257	接客	211	友達	117	卒業	76
活動	488	社会	206	会社	111	試験	74
勉強	418	関係	205	インターンシップ	106	海外	73
就職	394	実習	182	興味	105	教育	73
自分	388	バイト	176	コミュニケーション	98	話	69
仕事	370	研究	167	企業	88	参加	69
大学	348	ボランティア	162	人間	87	部活	68
授業	340	資格	160	留学	82	年間	65
専門	293	知識	156	ゼミ	81	旅行	61
学校	266	生活	153	取得	79	分野	60
友人	247	職業	143	先生	78	仲間	54
サークル	239	お金	131	体験	78		
経験	221	マナー	120	パソコン	76		

4. 頻出する語句の内容の時代的変容

前節では、25-1.の設問に対する自由記述データの全体的な傾向を把握したが、本節では(1)他者との関係を構築する上での第一歩目の対象となる【友達】【友人】、(2)「キャリア教育」とも関連する【授業】、(3)「キャリア教育」および様々な《キャリア教育》と関係する【自分】の3つの語句に注目して、他の語句との関連の時代的な変容を理解する。

(1)【友達】【友人】

【友達】【友人】は小学生の頃の自由記述で1位にランクした以外は順位を落としてはいるものの、常に頻出している語句である。図表7-5は、【友達】【友人】と関連のある語句の変遷を示したものだが、図表7-6の自由記述の例を見ると、【友達】【友人】は全体的に、「遊び仲間」、「コミュニケーション能力の向上に資する他者」として位置づけられていることが理解できる。また中学生の頃以降になると校区の広がりとともに新たに出会った他者との関係を構築することへの困難を覚え、そしてその克服の過程で、「コミュニケーション能力の向上に資する他者」として位置づけ直され、さらに高校生の頃や大学生の頃になると単に「遊び仲間」ではなく「相談相手」として位置づけられていることが理解できる。

図表7-5 【友達】【友人】と関連のある語句の変遷(相関係数 0.05 以上)

小学生の頃 (N=3932)		中学生の頃 (N=3932)		高生の頃 (N=3932)		大学生等の頃 (N=3932)	
友達	友人	友達	友人	友達	友人	友達	友人
コミュニケーション .141**	関係 .121**	コミュニケーション .087**	関係 .094**	話 .067**	話 .105**	旅行 .067**	旅行 .077**
遊び .135**	学校 .056**	話 .079**	中学 .060**	コミュニケーション .061**	関係 .103**	先生 .055**	海外 .076**
習い事 .072**	コミュニケーション .051**	体験 -.046**			相談 .075**		自分 .056**
関係 .062**	転校 .044**						
人間 .055**							
話 .050**							

** 相関係数は 1% 水準で有意(両側)。

図表7-6 【友達】【友人】と関連のある語句を含む自由記述の例

【「友達」「友人」と関連のある語句の登場する自由記述の例】

小学生の頃(「友達」「友人」と「コミュニケーション」「遊び」)

毎日**友達と遊ぶ**事が今の**人間関係**、**コミュニケーション**能力があると思う。(男性、大卒、正社員)

友達と遊ぶことを通じて、人との**コミュニケーション**のとり方を学んだ気がする。(男性、大卒、非正社員)

学童に入り、**友達とたくさん遊ぶ**事によって、**コミュニケーションスキル**が上がった。(高卒、女性、専業主婦)

中学生の頃(「友達」「友人」と「コミュニケーション」「関係」)

校区が広がり、**友達**がたくさんできた。見知らぬ人がいたから**コミュニケーション**をとるのが、大変だった記憶がある。(男性、大卒、正社員)

バレーボール部に入り、色々な**友達**が出来た事により**コミュニケーション**の能力を学べたと思う。チームプレイだったので良い事ばかりじゃなかったけど、楽しかった。(女性、高卒、非正社員)

友人関係に悩んだ。周りとの接し方がよく分からなかった。(女性、大卒、正社員)

高校生の頃(「友達」「友人」と「コミュニケーション」「相談」)

新しい**友達**が出来て**コミュニケーション**がとれる様になった。(男性、高卒、自営業・自由業)

いつも**友達**がたくさんいて、人との**コミュニケーション**のとり方が良いと感じたこと。(女性、大卒、正社員)

就職してからも色々**相談**出来る**友達**が出来た。(男性、大卒、正社員)

高校で一生の**友達**ができた。**仕事**で辛い事や苦しいことがあったとき、親身になって**相談**ののってくれる。(女性、高卒、非正社員)

大学生等の頃(「友達」「友人」と「旅行」「先生」)

友達と**海外旅行**にたくさん行ったが、日本よりも良い面も悪い面もたくさんあっていつか、海外で働きたいと思った。(男性、大卒、正社員)

海外旅行で海外の人と**友達**になる。(女性、大卒、正社員)

今だに付き合いがある**先生**もいるし、よく**話し**を聞いてくれたり、お互い社会人としての話しもできるし、高校までの先生とは違い、友達ではないにしろ、**いい関係**をもって付き合える**先生**が多い。(男性、大卒、正社員)

担任の**先生**が親身になって悩みを聞いてくれたため、大人に対する見方が変わった。今も時々**相談**する。(女性、大卒、正社員)

(2)【授業】

【授業】はどの時代においても、常に上位に頻出しており、「キャリア教育」の現在の職業生活への関係を見ることが出来る語句である。図表7-7から関連のある語句の変遷を見ていくと、小学生の頃では【機会】【ボランティア】となっているが、中学生の頃以降になると【パソコン】など実践的な授業科目へと関連の強い語句が移行していることが理解できる。そのことは図表7-8の自由記述の例と重ねてみるとより明確に理解できる。小学生の頃や中学生の頃では、仕事や職業を知る・調べる【機会】を通して職業について意識した経験が挙げられ、高校生の頃以降になると、【パソコン】などスキルに関わる事柄を【授業】で経験したことが挙げられている。ここからは、成長段階とともに職業に対する知識や意識を学ぶ機会から、実践的なスキルの学習へと「キャリア教育」の内容が変容していく様が理解できる。

図表7-7 【授業】と関連のある語句の変遷(相関係数 0.05 以上)

小学生の頃 (N=3932)	中学生の頃 (N=3932)	高生の頃 (N=3932)	大学生等の頃 (N=3932)
機会 .064**	英語 .134** 興味 .052**	学校 .146** 仕事 .054**	パソコン .143** 興味 .062**
ボランティア .050**	学校 .118** 体験 .051**	パソコン .145** 進学校 .054**	マナー .130** 知識 .057**
	パソコン .104**	選択 .125** 職業 .053**	学校 .098** 大学 .055**
	職業 .097**	数学 .105** 部活 -.050**	専門 .081** 話 .052**
	仕事 .087**	英語 .093**	興味 .062** 先生 .050**

** 相関係数は 1% 水準で有意(両側)。

図表7-8 【授業】と関連のある語句を含む自由記述の例

【「授業」と関連のある語句の登場する自由記述の例】

小学生の頃(「授業」と「ボランティア」「機会」)

学校の**授業**で、高齢者施設へと**ボランティア**に行ったこと。(男性、大卒、正社員)

3年生の時に、**授業**で近所の保育園で園児と遊ぶ時間があり、そこで保育の**仕事**の楽しさを知り、自ら**ボランティア**を希望し何度も遊びに行った。(女性、大卒、自営業・自由業)

勉強よりも、自然とふれ合う課外**授業**が多くあり、その場で、視野の広がる**機会**を得ることができた。(女性、大卒、正社員)

中学生の頃(「授業」と「職業」「体験」)

色々な**職業**を調べたり(就職するための手順なども)まとめた**授業**があり役に立った。(男性、大卒、正社員)

父親の**職業**について調べる**授業**があり、**職業**について初めて意識した。(女性、大卒、正社員)

学校の**授業**での**職場体験**により、職場の雰囲気を感じることが出来た。(男性、大卒、正社員)

体験授業でカメラマンの所にいった。(女性、高卒、正社員)

高校生の頃(「授業」と「学校」「パソコン」)

学校を休みがちになったため、もっと**授業**を受けていればより**英語**が読めて、仕様書読解が楽になったと思う。(男性、大卒、正社員)

学校の**授業**が選択できたこと(特に理科)。(女性、大卒、正社員)

パソコンの**授業**があり、**パソコン**の基礎的な事を学べた。(男性、高卒、非正社員)

パソコン操作の**授業**が充実しており、専門学校での学習の土台となった。(女性、大卒、正社員)

大学生等の頃(「授業」と「パソコン」「マナー」)

パソコンの基本的な使い方の**授業**(ITに関する基礎知識)。(男性、大卒、正社員)

授業以外に**パソコン**や簿記などの**資格**の**授業**を用意してくれていた。別に料金は掛かったがそれでも学校に通いながら**資格**が取れた。(女性、大卒、非正社員)

ビジネスマナーの**授業**があった為、それが役立っている。(男性、大卒、正社員)

パソコンの**授業**で秘書の**マナー**を学ぶのは、今の接客でプラスになっていると思う。(女性、大卒、非正社員)

(3)【自分】

【自分】もまた常に上位に頻出しているものの、それだけではどのような意味で用いられているのかは不明瞭な語句である。図表7-9に示すように関連のある語句をみてみよう。全体を通して見るならば、【自分】は常に【職業】や【仕事】と結び付けられて用いられていることが理解できるが、学歴別に見ると興味深いことに高卒者のみに最終学歴である高校生の頃に【バイト】【アルバイト】が登場する。さらに図表7-10の自由記述の例を見ると、【自分】と【職業】【仕事】が結び付けられているとはいっても、時代ごとにその意味内容の異同があることを理解できる。小学生・中学生の頃は、どちらかといえば「キャリア教育」との関連で【自分】がどんな【職業】に就きたいのかといった理想(「なりたいこと」)を明確化していったことが記述されている。だが、高校生・大学生の頃になると【アルバイト】や【就職活動】などを通して【自分】がどんな【職業】に向いているのか、といった現実(「できること」と直面していく様が見てとれる。もちろん高卒者と大卒者とでは高校時代の自由

図表7-9 【自分】と関連のある語句の変遷(相関係数 0.05 以上)

小学生の頃 (N=3932)	中学生の頃 (N=3932)	高生の頃 (N=3932)	高生の頃 [高卒] (N=535)	高生の頃 [大卒] (N=3375)	大学生等の頃 (N=3932)
職業 .079**	職業 .092**	大学 .104**	高校 .190**	大学 .109**	お金 .112**
仕事 .066**	進路 .069**	仕事 .096**	友人 .145**	仕事 .092**	興味 .086**
父親 .051**	高校 .066**	進路 .077**	バイト .135**	進路 .083**	生活 .085**
	興味 .058**	高校 .072**	仕事 .127**	成績 .076**	就職 .080**
	先生 .057**	お金 .062**	アルバイト .122**	学校 .058**	仕事 .080**
	経験 .056**	先生 .054**	話 .121**	お金 .055**	仲間 .066**
	仕事 .050**	話 .054**	勉強 .116**	高校 .053**	学校 .057**
		学校 .052**	お金 .116**	友達 .052**	友人 .056**
				就職 .051**	留学 .056**
				先生 .050**	勉強 .052**

**、相関係数は 1% 水準で有意(両側)。

図表7-10 【自分】と関連のある語句を含む自由記述の例

【自由記述の例(小学生の頃:「自分」と「職業」「仕事」「父親)】

親(父)と顔を会わず事がほぼないくらい**仕事**をしていたので自分はこうはなりたくないと思った。(男性、大卒等、正社員)
 図書室に「〇〇(職業名)になりたい」というシリーズの本があり、授業で自分のなりたい**職業**についてまとめて提出した。とくに夢をもっていたときなので強くおぼえている。(女性、大卒等、非正社員)
 将来、どんな**仕事**につきたいか? どうしたらその**職業**につけるかを自分で調べる授業があった。(女性、高卒、正社員)
 父親が添乗員で世界の様々な国に行っていた。自分もいろんな国に行きたいと思っていた。(男性、大卒、正社員)
 父親が自分の仕事の話をよく私に聞かせていた。楽しそうに話すので、世間には楽しい**仕事**があるのだと思った。(女性、大卒、正社員)

【自由記述の例(中学生の頃:「自分」と「職業」「進路」「高校)】

学校の総合学習で、自分の興味のある**職業**についている「人」をテーマに、インタビューや**職業**体験、レポート作成等行う。(男性、大卒等、正社員)
 職場体験によって、今まで**自分**が夢みた**職業**はあまりに現実離れていると気づいた。(女性、大卒等、非正社員)
 学校で**職業**体験はしたが、その頃の**自分**は、将来に向けてとか考えが全くなかったので、あまり役に立ってないかも。(女性、高卒、専業主婦)
自分の進路・夢・将来のビジョンを書かせる時間を設けられたこと。(男性、大卒、正社員)
 職業体験などがなかったため、**進路**を決める際にも**自分の**幅をせばめてしまったかもしれない。(女性、大卒、非正社員)
高校の選択はよかったと思う。自分のなりたい**職業**の分野の学校に行けたと思う。(男性、大卒、進学準備)

【自由記述の例(高校生の頃:「自分」と「仕事」「アルバイト」「大学)】

高1で初めて、**アルバイト**を経験し、自分でかせいで、**アルバイト**代を頂いたことは、良い面に影響した。(男性、大卒等、無職)
アルバイト上で接客をしていたら、初めは自分には不向きだと思っていた接客という**仕事**が自分に向いていることに気付いた。(女性、高卒、自営・自由業)
 工場の**アルバイト**を短期でしたこと。自分には、この**仕事**は合わないと感じた。(女性、大卒等、正社員)
アルバイト禁止という学校だったので、**自分**で稼ぐという体験ができなかったため、高校を卒業し、すぐ**仕事**に就き、働いて給料を頂くという大変さが分からなかった。(女性、高卒、専業主婦)
アルバイトを通して、年齢差のある人とのコミュニケーション。(女性、大卒等、正社員)
大学受験に向け、**自分**なりの**勉強**のしかたを確立したこと。今の**仕事**のすすめ方を考える上でも参考になっている。(男性、大卒等、正社員)
 色々なことに**興味**があり、**自分**がやりたいことが決められなかったため四年制**大学**へ進学。(男性、大卒等、無職)
 将来の夢があり、その達成のための**大学**を選ぶ友達を見た。**自分**には夢ややりたいことがない焦り、将来を考えるようになった。(女性、大卒等、正社員)
 様々な**大学**の情報や**職業**について調べていくうちに少しではあるが、**職業**についてと**自分の**将来についてイメージする事ができた。(女性、大卒等、非正社員)
 担任との二者面談で相談した後も、結局**自分**が**大学**でどんな**勉強**がしたいのかはっきりと答えをみつけられなかった。(女性、大卒等、無職)

【自由記述の例(大学生等の頃:「自分」と「就職」「お金」「興味」「勉強)】

アルバイトや**インターンシップ**、**就職活動**を通じて**自分**が民間企業より公務員の方が適性があると実感できた。(男性、大卒等、正社員)
進路に悩みまくる**就職活動**もうまく行かず挫折しかけた。**自分**には何が向いているのかを模索しつづけた。(女性、大卒等、専業主婦)
就職説明会に行くことがあったが、その時初めて、**自分**で将来を決めなくてはいけないことに気付いた。今までは決められていて楽だったことを知った。(女性、大卒等、正社員)
アルバイトを通して、実際に**自分の**時間を**仕事**にあてて、その分給料をもらう喜びと**お金**の大切さを学びました。(男性、大卒、正社員)
自分で貯めた**お金**で、稼げる資格を取ろうと学校に通ったが、もともと好きなことではなく中退。**アルバイト**で再び**お金**を貯めて、心理関係とデザイン関係の資格を取った。(女性、大卒、専業主婦)
アルバイトで、料理が好きだったので**興味**があった飲食店の**仕事**をしたが、短時間で多くの**仕事**をこなすのは得意ではなく、**自分**には向いていないと気づいた。(女性、大卒、正社員)
アルバイトで某コンビニエンスストアに数年間、務めました。その中で**マナー**、**コミュニケーション**、**段取り**、**経営**など**社会勉強**をしました。(男性、大卒等、非正社員)
自分の好きな**勉強**をすることができ、**勉強**していく中で、これからの人生に必要な**経験**もいくつかすることができた。(女性、大卒等、正社員)
 良い面は、学校の**先生**の進めで**ボランティア活動**をしたことがきっかけで教育者への道をめざす行動を起こすことができた。**自分**でやりたいと思ったことをつらぬき通し、**勉強**は大変だったが資格取得をすることができた。(女性、大卒等、専業主婦)

記述に差異はみられる点には留意が必要だが、「就職」を現実的に考えるとき、「キャリア教育」を通して明確化した理想と、【アルバイト】などの《キャリア教育》を通して直面した現実とが交錯する過程で「自分とは何か」が明確化されていくと言えるのではないだろうか。

以上より、成長するごとに現在の職業生活に関係のある「キャリア教育」の内容も機会からスキルへと変容し、《キャリア教育》との関連も色濃くなることが理解できた。次節では、《キャリア教育》を支える【アルバイト】と【活動】に焦点を当てることにする。

5. 【アルバイト】【活動】が意味する《キャリア教育》

本節では【アルバイト】【活動】と他の語句の関連から《キャリア教育》の特徴を抽出する。

(1)【アルバイト】と他の語句との関連

【アルバイト】は高校生の頃以降になると上位に頻出するようになる語句である。図表7-1 1から【アルバイト】と関連の強い語句は、【接客】、【お金】、【経験】であり、また高校生の頃では【社会】とともに用いられていることが理解できる。この点を図表7-1 2の自由記述の例から確認すると、【アルバイト】で【接客業】に携わった【経験】、【お金】を稼ぐことの【経験】を通して【社会】のルールやマナーを勉強したという記述が目立つ。それまでの学校内での活動とは異なる【アルバイト】という経験は、「労働」とはいかなることかを認識する契機であり、職業生活に結びつく社会的なルールの教育的効果を有している。

では、【アルバイト】の経験は現在の職業生活にどのように関係しているのだろうか。その点を現在にどのような関係があるか(25-3.)の自由記述から確認しよう。図表7-1 3は25-1.の自由記述で【アルバイト】を挙げた人の25-3.の自由記述を、25-2.で選択した最も関係のある時代別に例示したものである。その記述を見ると、高校生の頃をもっとも関係があると答えた人も大学生の頃をもっとも関係があると答えた人の多くは、【アルバイト】の経験と現在の職種や職業上の特徴との関連を見だし、それが現在の職業生活に生かされていると【アルバイト】の経験を解釈していることが理解できる。このような意味で、【アルバイト】という経験は《キャリア教育》の一翼を担っている。

図表7-11 【アルバイト】とその他の語句の関連(相関係数 0.10 以上)

全体 (3932)	高校生の頃				大学生等の頃	
	高卒 (535)		大卒 (3375)		大卒 (3375)	
接客 .289**	社会 .165**	接客 .285**	社会 .159**	お金 .311**	社会 .157**	接客 .270**
お金 .273**	仕事 .116**	経験 .223**	お金 .132**	接客 .282**	仕事 .120**	お金 .189**
経験 .179**		年間 .165**	自分 .122**	経験 .172**		経験 .175**
						専門 -.108**

** 相関係数は 1% 水準で有意(両側)。

図表7-12 【アルバイト】と関連のある語句を含む自由記述の例

【自由記述の例(「アルバイト」と「接客」「お金」「経験」「社会」「仕事」)】

アルバイトを通じて、**社会勉強**をし、**仕事**の重要さを学んだ。(高校生の頃、男性、大学等、正社員)

3年間アルバイトをしていた為、**社会**のルールや上司に対する言葉使いや**お金**を稼ぐ事がどれだけ大変かわかった。(高校生の頃、男性、高卒、正社員)

初めてアルバイトをして働く**経験**ができたこと。なんとなく働くということがどう言うことかがわかった。(高校生の頃、男性、大学等卒、非正社員)

初めてアルバイトをした。レジやウェイトレスなどの**接客業**を経験。社会の基本的なマナーを学べた。(高校生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

一人暮らしをし**アルバイト**や家事など全てを自分でこなすことで**金銭**感覚や対人関係を勉強できた。(大学生等の頃、男性、大学等卒、正社員)

アルバイトをたくさんしたので、世の中には色々な人がいて、その人たちとうまく**仕事**をやっていくのも**仕事**のうちだと人間関係について学んだ。(大学生等の頃、女性、大学等卒、非正社員)

図表7-13 【アルバイト】の経験と現在の職業生活との関係

【自由記述の例(「現在の職業生活」にどのように関係があるか: 高校生の頃がもっとも関係があるを選択した人の【アルバイト】を含む自由記述)】

仕事(アルバイト)を15才から始め、他の人よりも早くから社会人の自覚を持った。その事により、大学等卒後の就職で同期の人と比べ、良い成績をおさめた。(男性、大学等卒、正社員)

様々なアルバイトをする事で対人関係についての勉強する事ができた。今の仕事では、毎日見知らぬ人達と電話で話しています。(男性、大学等卒、正社員)

調理士として働いており、料理を作る楽しさを知った。(男性、高卒、正社員)

多少の理不尽を感じても、お客様第1の行動がとれるようになったのは、この時のアルバイトが生きていると思う。(女性、大学等卒、正社員)

接客の仕事なので、大きい声を出したり、笑顔で接客することは当たり前なので、高校のころからアルバイトでやっていたので、苦にならずできる。(女性、大学等卒、非正社員)

【自由記述の例(「現在の職業生活」にどのように関係があるか: 大学生の頃がもっとも関係があるを選択した人の【アルバイト】を含む自由記述)】

会社においても、対人能力が高い人が、仕事が良くてできることから、アルバイトでレベルアップすれば、社会に出て役立つと感じているから。(男性、大学等卒、正社員)

アルバイトで実際に、正社員と共に働いたことで、仕事に対する自信や責任感、仕事のやり方・進め方を経験したことが、今の仕事の行動指針になっている。(男性、大学等卒、正社員)

以前働いていた職場は、そこでアルバイトをしていて、ここでずっと働きたいと思い改めて正社員面接をさせてもらい、採用してもらったので、とても関係が深かったと思う。実際、ジャンルにとらわれることなく、アルバイトを経験することが出来、またこの職場と出会ったことは、自由のきく大学生活でしかできなかったことだと思う。(女性、大学等卒、専業主婦)

とにかく食べものに興味があり、バイト先ではとにかく食べ物の話、それをしていても否定されないバイトメンバーとの会話で、より自分の調理をしたい! 何かメニューを作りたいと思う夢が強くなり、初めて就いた仕事も飲食系の仕事につけた。(女性、大学等卒、非正社員)

(2)【活動】と他の語句との関連

【活動】はそれ自体では不明瞭であるが、常に上位に頻出する語句である。図表7-14から【活動】と他の語句との関連を確認し、【活動】の意味内容を理解しよう。小学生の頃の【活動】はクラブ活動やボランティア活動であるが、中学生の頃になると部活動や生徒会活動が登場する。【上下】は、部活動などを通して先輩-後輩の関係を学んだということの意味する。そのことは図表7-15の自由記述の例からも理解できる。さらに注目すべきは「最終学歴」においてのみ【活動】が就職活動と結びつくことである。ここでは就職活動に関する「キャリア教育」だけではなく、就職活動それ自体を通して、礼儀作法を学んだことが挙げられており、この意味で就職活動もまた《キャリア教育》の効果を果たしていることが興味深い。

図表7-14 【活動】とその他の語句との関連(相関係数 0.10 以上)

小学生の頃 (N=3932)	中学生の頃 (N=3932)	高校生の頃 (N=3932)	高校生の頃[高卒] (N=535)	高校生の頃[大卒] (N=3375)	大学生等の頃 (N=3932)
クラブ .403**	部活 .495**	部活 .515**	部活 .447**	部活 .523**	就職 .472**
ボランティア .331**	クラブ .255**	クラブ .241**	就職 .302**	クラブ .252**	サークル .361**
	上下 .150**	上下 .128**	生徒 .219**	上下 .133**	部活 .244**
	ボランティア .123**	ボランティア .128**	ボランティア .165**	ボランティア .124**	ボランティア .130**
	生徒 .112**				

** 相関係数は 1% 水準で有意(両側)。

図表7-15 【活動】と関連のある語句を含む自由記述の例

【自由記述の例(「活動」「部活」「クラブ」「サークル」「ボランティア)」】

スポーツクラブで集団活動学ぶ。(小学生の頃、男性、大学等卒、正社員)

クラブ活動に入り、先輩や後輩という関係ができた。(小学生の頃、女性、高卒、非正社員)

老人ホームでの、ボランティア活動(清掃業務)を通じて勤勉に働くことでの職場への貢献を知ることができた点が良い面と思います。(小学生の頃、男性、大学等卒、正社員)

ボランティア活動を通じて、社会の役に立つことを行う、ということを知り意識した。(小学生の頃、女性、大学等卒、正社員)

部活動で先輩や後輩との人間関係を学びました。(中学生の頃、男性、高卒、正社員)

部活動にうちこむことに努力と、負けない気持ちを培う事ができた。さらに高みにのぼるために努力を重ねた。(中学生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

先生からボランティア活動を勧められ、参加した事で社会奉仕が気持ち良い事に思えた。(中学生の頃、男性、大学等卒、正社員)

ボランティア活動で老人ホームを訪問し、そこで知りあった方(老人)と、文通するようになった。私と手紙をやりとりする事によるこびを感じてもらっていたようで、私自身もうれしかった。人と接する仕事を“いいなあ”と感じました。(中学生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

部活動をする事で協調性が身に付いた。(高校生の頃、男性、大学等卒、正社員)

部活動による精神力、忍耐力、体力の強化 体の健康維持。(高校生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

部活でのボランティア活動が私自身の価値観や考え方を大きく変えた。(高校生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

サークル活動を通して、社会の見方や考え方を多角的に学んだ。(大学生等の頃、男性、大学等卒、自営業・自由業)

世界観が広がったサークル活動:全国規模のサークルに入っていて、いろんな価値観や情報・仲間を得た。(大学生等の頃、女性、大学等卒、)

ボランティア活動を通して人の役に立つ職につきたいと感じていた。(大学生等の頃、男性、大学等卒、その他)

ボランティアサークルでの活動。障害児教育に関するものだったので、今の仕事で、子供に関するイベントや教育活動に役に立っている。(大学生等の頃、女性、大学等卒、正社員)

【自由記述の例(「活動」と「就職)」】

良い面で、就職活動の時に、礼儀作法の大切さを学んだ。(高校生の頃、男性、高卒、非正社員)

就職活動を通じて、事前準備の大切さを知った(面接の練習や、模試など)。(高校生の頃、男性、高卒、正社員)

部活動に打ち込んだため、就職後も、我慢することや、継続することの大切さを学び、力になった。(高校生の頃、女性、大学等卒、非正社員)

就職活動を初めてした時に面接の仕方、人との接し方、礼儀などを学びました。(高校生の頃、女性、高卒、非正社員)

就職活動ガイダンスなど積極的に大学が開催してもらうことにより、業界のことも学ぶことができた。(大学生等の頃、男性、大学等卒、正社員)

インターンで今の会社で体験、職種の楽しさを知り就職活動でその会社を受ける。(大学生等の頃、男性、大学等卒、正社員)

就職活動の進め方や、社会人としてのマナー・言葉づかいについての授業。(大学生等の頃、女性、大学等卒、非正社員)

就職活動を通じ学生と社会人との違いを感じとる事ができました。(大学生等の頃、大学等卒、専業主婦)

ここで【アルバイト】と同様に、【活動】の経験が現在の職業生活にどのように関係があるのかについて確認しよう。図表7-16は25-1.の自由記述で【活動】を挙げた人の25-3.の自由記述を、25-2.で選択した最も関係のある時代別に例示したものである。その記述を見ると、【部活】を通して培った社会性やコミュニケーション能力、協調性、忍耐、【ゼミ】を通して得られたプレゼンテーション能力など多様であるが、いずれも他者との関係性を構築していく術を学んだことが現在に生かされていると記述されていることが理解できる。

ところで【活動】と【アルバイト】の間に関連は見られないことから、この2つの語句はいずれも主体的な行動であるという点では共通するものの異なる意味内容を示しており、【活動】は、人間生活を営む上での基礎的なルールの学習と関連し、職業生活に結びつく社会的なルールの教育的効果を有している【アルバイト】とは異なる意味で《キャリア教育》の効果を果たしている。ここから、《キャリア教育》とは私たちが主体的に行動する中で、基礎的なルール(【活動】)や社会的なルール(【アルバイト】)を学習する経験を意味すると言うことができるだろう。

ここまでの検討から示唆されることは、「最終学歴」における《キャリア教育》が現在の職業生活にもっとも関係しているのではないかという点である。節を改めその点を検討する。

図表7-16 【活動】の経験と現在の職業生活との関係

<p>【自由記述の例(「現在の職業生活」にどのように関係があるか: 高校生の頃がもっとも関係があるを選択した人の【活動】を含む自由記述)</p> <p>部活動を通じて身に付けた社会性、コミュニケーション能力や集団における協調性が現在の基礎となっており仕事が円滑に進む要因の1つであると考えている。(男性、大学等卒、正社員)</p> <p>3年間継続した事による忍耐力と、上下関係による、あいさつや言葉づかいなどの人間関係のとり方。(男性、大学等卒、非正社員)</p> <p>仕事をする上で、いつも自分の思い通りになることばかりではなく、上司から厳しい言葉を言われることもあるが、高校時代、辛い部活動を辞めずに続けることができたことで自分の中に自信が持てている。(男性、高卒、正社員)</p> <p>現在の職業には人前で食べ物を作る難しさ、人間関係の難しさ、仕事へのやりがい、その他、事務作業も含め中学、高校で学んだ簿記や経理の経験、人間関係の経験を生かし役に立っていると思います。(男性、高卒、非正社員)</p> <p>この時期にPCを学んでいなかったら、今の自分はこんなにくわしくなかったと思う。今の社会でPCは必要不可欠なので、面白さに気付いて良かったと思う。(女性、大学等卒、正社員)</p> <p>目標をたてて、まわりと達成していくために話し合い、協力して、はげますことをしたので、仕事でもあたりまえに同僚と協力することができ、事がうまくいくと思う。(女性、大学等卒、非正社員)</p> <p>高校時代に学んだ面接の仕方や、礼儀などが、今の会社のマニュアルに大変影響しています。目上の方への接し方や、自分の行動の責任感を重く感じています。(女性、高卒、非正社員)</p>
<p>【自由記述の例(「現在の職業生活」にどのように関係があるか: 大学生等の頃がもっとも関係があるを選択した人の【活動】を含む自由記述)</p> <p>ゼミの教授の話によって金融機関への就職を希望し、現在の職業となっているため。(男性、大学等卒、正社員)</p> <p>これまでの学生生活の中では、勉強や友人とのコミュニケーションが、現在行っている営業活動をしていく上で、とても重要な経験となって活きていると感じます。学生時代に築き上げた感性においても同じ事が言えます。(男性、大学等卒、正社員)</p> <p>インターンシップがあったのはとてもよかったです。それが、今になって役に立っていると感じる。(男性、大学等卒、非正社員)</p> <p>上下関係を学んだことで、社会人になって人との付き合い方が分かった。(男性、大学等卒、無職)</p> <p>教師という職業に就いている現在、やはり大学時代の教育実習が一番今までの思い出に残っています。仕事が忙しい時や辞めたくなった時も、その頃の写真やもらった色紙などを見たりすると、がんばれる。(女性、大学等卒、非正社員)</p> <p>やはり、辛い事でも仲間や先生を信じて乗り越えてきました。その中で、どんな仕事に対しても、継続して一生懸命頑張ろうという事を学び、いい先生に出会えたから、私も先生になって、夢や希望、一生懸命やる事の素晴らしさを伝えたいと思いました。出会いって、やっぱり大切です。(女性、大学等卒、専業主婦)</p> <p>いろいろな人と話すときに、自分の経験が話のネタになったりする。学生時代の部活動等でたくさん運動してきたことでじょうぶな体が得られ、かぜで仕事をやすまなくてすむ。(女性、大学等卒、正社員)</p> <p>ゼミ活動で学んだこと。民間企業へプレゼンテーションを行い、企業の色・方向性など特色を知った。自分の考えを相手に伝えることの難しさを知り、努力した。その時身につけたコミュニケーション・プレゼン能力は役立っていると思う。(女性、大学等卒、正社員)</p>

6. 転機としての最終学歴

《キャリア教育》とは、私たちが主体的に行動する中で、基礎的なルールや社会的なルールを学習する経験として指摘した。さらに、「最終学歴」における《キャリア教育》が現在の職業生活に関連があるのではないかとということが示唆された。本節では、この点について検討する。図表7-17は、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」(25-2.)の結果を学歴別に示したものである。図表から理解できるように、学歴を問わず、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」は「最終学歴」へと結びつく傾向が見られる。

前節までにみてきたように、【アルバイト】は高校生の頃において登場するようになり、【就職】は「最終学歴」において【活動】と結びつく語句である。「最終学歴」が現在の職業生活にもっとも関係がある時代として選択される理由を探るには、大卒者の場合を考えてみる事が補助線となる。仮に労働の意味やそれに伴うルールを学習する【アルバイト】のみが重要であれば、大卒者であっても「高校生の頃」をもっとも関係のある時代として選択すると考えられる。だが、実際は【アルバイト】と【就職】(活動)の2つが重なる「大学生の頃」をもっとも関係のある時代として選択している。すなわち、高卒者よりもより多くの選択肢を有している大卒者が、現在の職業生活からみてもっとも関係のある時代として「最終学歴」を挙げる背景には、【アルバイト】のみならず、実際に職業や何が自分にできるのかを考える【就職】(活動)の経験とが重要な位置を占めていると推察できる。換言すれば、「最終学歴」が選択されることは、それが単に現在からもっとも近い過去としての学校時代であるため

はなく、その時代の自身の選択に結びついた【アルバイト】や【就職】（活動）が重要な意味を有しているということが関係していると言える。

以上より、現在の職業生活は、「最終学歴」時点における「就職」の経験に大きな影響を受けていると考えられる。20歳代の若者が「これまでの人生でともっとも影響を受けた出来事」としてあげた出来事の経験年齢は15歳と18歳という進路選択とも重なる時期に頻出することが報告されている（角田，2004）。であるならば、「就職」および「職業生活」という観点からみた場合、「最終学歴」は「就職」という人生の選択が迫られる時期——転機として考えられる。だが、図表7-17からも理解できるように、学歴を問わず約70%前後の人が「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」を挙げているが、残りの30%はそれとは異なる時代を挙げている。その背景を理解するためには、回答者が現在の職業生活の観点から過去を想起するという本調査の構造を考える必要があるだろう。それゆえに、回答者が置かれている「現在」との関連で、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」の選択の異同を検討することが重要となる。さらに、その検討を通して、回答者がキャリア教育や過去の経験をどのように捉え、意味づけているのかを理解することが可能となるだろう。

図表7-17 学歴と現在の職業生活にもっとも関係のある時代のクロス表

	現在の職業生活にもっとも関係のある時代									
	小学生の頃		中学生の頃		高校生の頃		大学生等の頃		合計	
大学等	220	7.5%	192	6.5%	535	18.2%	1997	67.8%	2944	100.0%
高校	42	9.8%	75	17.5%	311	72.7%	-	-	428	100.0%
合計	262	7.8%	267	7.9%	846	25.1%	1997	59.2%	3372	100.0%

※ カイ二乗値は1%水準で有意

7. 現在の状況による過去の意味づけの異同

【アルバイト】や【就職】（活動）を経験した「最終学歴」が「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として想起される傾向にあることと、それらの経験が当の時代において重要であると認識していたか否かは別の問題である。大部分が「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」を挙げる一方で、それとは異なる時代を挙げる人が学歴を問わず一定数存在することはその証左となるだろう。そこで本節では「現在にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」以外を選択する人の特性および過去の意味づけの検討を通して、逆説的に学校時代のキャリア教育の課題を浮かび上がらせてみたい。このような一見すると少数派として一括りにされてしまう層に着目し、その「質」的な分析を行うところに、自由記述データによる分析の旨みがあるように思われる。

(1)現在の身分

「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」の選択は一様ではない。この選択の異同が

何に依っているのかは端的に回答者の置かれた「現在」との関連で理解できるのではないだろうか。なぜならば、①学校時代のキャリア教育の経験は、「現在」の観点からの想起という形式をとっているため、②学歴による検討を通して回答者の過去の生活史の中で、いつの時代が重要とされるのかという構造を理解することはできても、回答者の「現在」は問えないためである。そこで本節では、回答者の「現在」の状況を示す「現在の身分」に着目して、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」を選択したか否かと「現在の身分」との関係から、「最終学歴」以外を選択する人の特性について考察する。

図表7-18は、「現在の身分」から「正社員」（正社員・正職員など）、「非正社員」（契約社員・嘱託、派遣社員、パートまたはアルバイト）、「専業主婦」（専業主婦（主夫）、または結婚の準備）、「無職（求職中）」（無職で仕事を探している）、「無職（何もしていない）」（無職で何もしていない）を抽出したものであり、この分布をみると、大半が「正社員」となっている。そして、「最終学歴を選んだか否か」の結果を見ると、「正社員」から順に「非正社員」、「無職（求職中）」、「専業主婦」、「無職（何もしていない）」の順に最終学歴を選択する傾向は弱まっていくことが理解でき、かつこの傾向は1%水準で有意な関連がみられる。

この結果で注目すべきことは、「正社員」のみならず、「非正社員」や「無職」であっても求職中の者は比較的「最終学歴」を選択する傾向にあるのに対して、「専業主婦」や「無職（何もしていない）」者は、「最終学歴」を選択する傾向が低くなることである。「現在の身分」は確かに「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」の選択を規定する一要因となっている。だが、その分水嶺は「正社員」か否かではなく、「無職」でも求職中の者は「最終学歴」を選択する傾向が見られることから理解できるように「労働市場の中に身を置いているか否か、意欲があるか否か」（＝「労働市場との断絶」）に引かれるところが重要である。

以上より、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」以外を選択する人は、「正社員」か否かという職業生活上の可視的な現在の状況ではなく、「労働市場との断絶」があるかないかという社会的・心理的な現在の状況に依存しているという特性を帯びていることが示唆される。では、その人たちは、キャリア教育や過去の経験をどのように意味づけているのだろうか。

図表7-18 現在の身分と最終学歴を現在の職業生活にもっとも関係のある時代に選んだかのクロス表

		現在の身分											
		正社員		非正社員		無職 (求職中)		専業主婦		無職 (何もしていない)		合計	
現在の職業生活にもっとも関係のある時代	最終学歴	1440	71.3%	472	66.2%	68	65.4%	205	59.8%	14	51.9%	2199	68.6%
	それ以外	579	28.7%	241	33.8%	36	34.6%	138	40.2%	13	48.1%	1007	31.4%
	合計	2019	100.0%	713	100.0%	104	100.0%	343	100.0%	27	100.0%	3206	100.0%

※残差の分析の結果、5%水準で有意に値が大きい個所を太字、小さい個所に下線を付した。

※ カイ二乗値は1%水準で有意。

(2)最終学歴以外を選択した人の理由

P. Berger は「われわれは、ある社会的世界から別の社会的世界へと移動するにつれて、われわれの世界観を変えてゆく（それゆえ、われわれが自己の生活史に対して行った解釈・再解釈も再び変わってゆく）」(Berger 1963=1995: 95) と指摘した。このように「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」を選択した人は、学校生活から職業生活へと移動する中で、「最終学歴」時点における【アルバイト】や【就職】(活動)の経験を有意義なものとして解釈していると言える。ところが、「最終学歴」以外を選択した人にとっては、現在置かれている状況から、それとは異なる解釈をしている。つまり、「就職」という経験とその結果によって、過去の経験の捉え方は変わってくると考えられる。そこで、「最終学歴」以外を選択した人が、どのような経験を現在の職業生活に関係のあるものとして記述しているのかという点から過去の意味づけの差異を確認し、そこから「キャリア教育」の課題を見出してみたい。

図表7-19は、最終学歴以外を現在の職業生活にもっとも関係のある時代として選択した人の自由記述の例を「現在の身分」ごとに提示したものである。以下、この図表を参照しながら、それぞれの特徴を検討する。

「正社員」および「非正社員」の大部分は、「最終学歴」以外の過去のある時点を「現在の職業生活と関係のある時代」として選択する場合、過去を立脚すべき転回点として捉えていることが理解できる。具体的には、「夢・目標」が定まった時点、「進路選択・職業選択」を決定づけた時点、現在の職業生活に関連づけられる「コミュニケーション能力」が涵養された時点といったような語りであり、過去を肯定的に捉えていることが特徴である。

「専業主婦」もまた、多くは「正社員」「非正社員」と同様の語り方であるが、特徴として興味深いのは、主婦業の特性でもある母親としての役割と関連して、幼少期の自身の経験を挙げる者が28%いることである。この場合、過去は準拠すべき時点として選択されており、肯定的に解釈されている。

一方で「無職」は過去を現在の状況を生み出した帰責の対象であり否定的に捉えている点に特徴が見られる。具体的にみると、「無職(求職中)」では28%、「無職(何もしていない)」ではその傾向がより顕著になり62%が、「怪我や病気といった過去の経験が現在の障害になっている」といったトラウマ的な語り方や「やりたいことが見つからなかった」といった語り方をしている。このような過去の捉え方をする人の割合の差異が「求職中」と「何もしていない」との間で、「最終学歴」を選択するか否かという異同とつながっていると考えられる。

ここから見出されることは、①「正社員」「非正社員」「専業主婦」は現在を梃子にして過去の準拠点を模索していく中で、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」を選択することもあれば、それ以外を選択することもある一方で、②「無職」(特に「無職」の内、「何もしていない者」)は過去を否定的に捉え現在の問題を過去に帰責し、過去が現在を規定しているという解釈をするため、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」と

図表7-19 最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述の例

【最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述：正社員】

科学そのものへの興味の火種となり、嫌われがち、理系科目を学ぶことが楽しかった。それは、現在も続いている。(男性、大学等卒、小学生の頃)

小学生①で出会ったお姉さんは学校の先生を目指していたが保育士のアルバイトもしていた。私が児童館の先生か保育士かまよっていた時にアドバイスをくれ自然と保育士の道へ行くことになった。私が高校3年の時お姉ちゃんも小学校の先生をあきらめ保育士になり、より保育士へのあこがれも。(女性、大学等卒、小学生の頃)

今この場でやってもよいことか悪いことなのか判断できない(しない)人が多く、それを注意する人もいない。小さい時に注意しないと、大人になってから言っても意味がない。(理解できていない。)(女性、高卒、小学生の頃)

教育産業に携わっている為、かつて自分が勉強した体験・内容をそのまま子供に伝える事ができている。(男性、大学等卒、中学生の頃)

ゼロの状態から仲間と協力して1つのモノを形づくっていく工程が、サッカー部創設の頃と似ている。(男性、高卒、中学生の頃)

教師という職業の専門性とやりがいを感じ取った。(男性、大学等卒、高校生の頃)

物事の見方を一側面だけではなく多角的に見られるようになり、継続力を培ったと思う。(女性、大学等卒、中学生の頃)

今現在、営業をふまえた事をしていて、色々な人との関わりがあるので、人とのコミュニケーションの取り方や、相手を思いやる事などが関係してきてると思います。(女性、高卒、中学生の頃)

中学まで大人しく、勉強もできなかったもので、高校は遠へ行って誰も知らない環境にした。そこで積極的な行動(学級委員になった)を取って、自分が変わった。どこかで勇気を持って、自分を変えなくては！！(男性、大学等卒、高校生の頃)

行く気はなかったが商業高校に行くことになり、簿記やパソコンを勉強し、事務の仕事っていいかもと思うようになった。実際、今事務の仕事をしているが、当時やった事が役に立っている。(女性、大学等卒、高校生の頃)

実際に見学したことで、大学受験に対して決心が固まり、集中的に勉強に打ちこむことができ、大学に合格できた。職種上、学校を卒業することが国家試験の受験資格であるため、学校へ入学することが将来の一步を作ったと考える。(女性、大学等卒、高校生の頃)

【最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述：非正社員】

小学校の頃から抱いていた夢をどうしてもあきらめきれずにいて、一度は小学校の現場で働きたいと思っていた結果、今現在、教師とは違うが小学校という現場で働くことができているから。(男性、大学等卒、小学生の頃)

基本は小学校の頃に見た甲子園がきっかけでスポーツが好きになった。そして、スポーツにかかわる仕事がしたいと思い、教師になり顧問として全国に行きたいと思ったきっかけ。(男性、大学等卒、小学生の頃)

パートの仕事では、特にない。主婦業では自分がしつけされた事を参考に子育てしているから、かなり関係あると思う。(女性、高卒、小学生の頃)

部署内に、年上の上司や、年のはなれた(年上の)部下がいて、とても人間関係の構築に悩んだ。タテとヨコの人間づきあいの仕方の違い、というものの経験が役立っている。(男性、大学等卒、中学生の頃)

パレ一部に入室しとても上下関係がきびしく、敬語やあいさつなど今につながる事を学べました。社会に出て敬語とあいさつに最低限のマナーなので今になって思えば、役に立っているなと思います。(女性、高卒、中学生の頃)

くじけそうになっても、なぜ看ぶ師になったのかという原点を再確認することで、また頑張れるから。(女性、大学等卒、高校生の頃)

今になって、そういえば高校で教えてもらったマナーだなと思うことがある(男性、大学等卒、高校生の頃)

【最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述：専業主婦】

今は専業主婦として家のことを主にやっているの、昔母親に教えてもらった家事が役立っている。(女性、大学等卒、小学生の頃)

子育て中の主婦として、今まで経験したことはすべて役に立っていると思う。特に、兄弟の面倒を見ていたことは役に立っている。しかし、学校生活という点に限定すると、具体的にはうかばない。(女性、大学等卒、小学生の頃)

子育てをする中で子供がどのように接すると喜ぶか、などわかっていて育てやすい。(女性、高卒、中学生の頃)

現在は主婦なので何も仕事はしてないけれど、子供2人を育てるのに、昔、保母さんになりたかったので少し関係があると思った。(女性、高卒、中学生の頃)

学生時代の体験や生活において学んだマナーや日常の常識、人との関係を築いていく上で重要なことなどが、現在子育てや主婦としての生活において役立っていると思う。(女性、大学等卒、高校生の頃)

大学に入って卒業するまでに結婚、出産を経験し、就職や進学することもなく、そのまま専業主婦になったので、大学に入ったことが大きな別れ道になったと思う。(女性、大学等卒、高校生の頃)

【最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述：無職(求職中)】

もっと若い頃に自分の適性に気付いていれば大きく変わったと思う。(男性、大学等卒、小学生の頃)

自分が後々の進路を選ぶ、大きな基礎になったと思う。もし小学校の頃、授業がしぼりのあるものであったり、そもそも軽視されてカットされていたら、絶対に今の自分の価値感は無かったと思うので。(女性、大学等卒、小学生の頃)

子どもの頃に受けた心の傷は、余程のことがない限り克服することができません。特に対人関係は、ダメージが大きく、社会人になっても、世間から距離を取りたいと思うことが多いです。(女性、大学等卒、小学生の頃)

ものづくりの楽しさが分かるようになった(男性、高卒、中学生の頃)

部活で椎間板ヘルニアになり、現在も長時間立っているのが大変。よって働ける(就ける)職業の幅がかなり狭まった。(男性、大学等卒、高校生の頃)

【最終学歴以外を現在の職業生活に関連のある頃と答えた人の自由記述：無職(何もしていない)】

やりたいことが見つからなかった。(男性、高卒、小学生の頃)

最早、永久に真っ当なホワイトカラーとして働いて行ける能力が自分にはなく、病んだ体で他人に迷惑をかけ続け、いずれ下らない死に方をすることをよく理解出来た。中学時代に負った傷が、永遠に心をむしばみ続け、それを治す術はない。少なくとも、2度と普通の人、同年代の人間のような職に就き、働くことはないだろう。(男性、大学等卒、中学生の頃)

自らの精神状態を管理できなかった自分の責任ではあるけれど、不登校になったことでほぼ決定していた大学の希望学部・学科への内部推薦が取り消されて、同時にずっと追いかけていた将来の夢がつぶれてしまったので未来を考えるのが嫌になった。(男性、大学等卒、高校生の頃)

して「最終学歴」以外を選択する傾向が高くなるのではないかということである。だが、重要なことは、「無職」だから過去を否定的に捉えているというような解釈をすることではなく——そのような状況に置かれた「個人」の問題と捉えるのではなく、同じようなライフコースを辿ってきたはずなのに過去をそのように解釈せざるを得ないその背景——現在の「社会」が抱える問題との関連で、「個人」の問題を考えることであるように思われる。なぜならば、「現在」が変われば「過去」の解釈もまた異なるものになり得るからである。

以上、「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」以外を選択した、言わば少数層の特性やその背景を「質」的に検討することで見出された「キャリア教育」の課題を提示する。第1に、誰もがスムーズに職業生活に移行することを前提とせず、そこから漏れた人たちの問題を、「社会」との関連で捉え過度に「個人」の問題として帰責しないことが挙げられる。それに関連して、第2に、職業体験や職業に関する知識、職業生活において必要とされるスキル、働くことはどういうことかといった点の教授と同時に、学生のような《キャリア教育》の経験を有意味に紡ぎあげていくような支援、換言すれば、固着した過去を解きほぐし、再構成して自己理解を促していく支援が課題として挙げられる。そのためには学校時代のみならず、継続的な支援が求められていると言えるのではないだろうか。

8. まとめ

本章は、自由記述データを用いて、「現在の職業生活に関係する出来事」および「もっとも関係する時代」、それらを想起する「現在の状況による過去の意味づけの異同」を検討してきた。これらの分析は自由記述というデータの特性上、限定的なものかもしれない。だが、計量的な分析では扱うことが難しい回答者の主観的な意味世界の分析を通して幾つかの知見と課題が得られた。最後に、本章の検討から得られた知見と課題を提示しよう。

まず本章の検討から得られた知見についてである。第一に自由記述の内容の時代的変遷の分析を通して、職業生活に関係する各時代における基本的な事柄を見出したことである。具体的には①関与する他者（【友達】【先輩】など）や活動（【クラブ】【部活】【アルバイト】【サークル】など）の幅の広がり、②同一の語句の意味内容の変遷——【友達】【友人】は遊び仲間から相談相手へ、【授業】から理解できる「キャリア教育」は職業について体験・理解する機会から職業上有益なスキルの獲得へ、職業意識（【自分】）は理想（なりたいこと）から現実（できること）へ——を理解した。

第二に、職業生活を営む現在から学校時代の経験を想起した際に、授業としての「キャリア教育」も一定の記述があるものの、人間生活を営む上での基礎的なルールの学習である【活動】と職業生活に結びつく社会的なルールの教育的効果を有している【アルバイト】といった《キャリア教育》がより「現在の職業生活に関係した出来事」として結びつく傾向にあることを明示した点である。ここから学校時代のキャリア教育を「キャリア教育」と《キャリア教育》との双方から分析する視点の有効性が見出されたと思われる。

第3に、「現在の職業にもっとも関係した時代」について①学歴を問わずに約70%の人が《キャリア教育》(【アルバイト】【就職])と「キャリア教育」(【就職])を経験した「最終学歴」を選択する一方で、②「現在の身分」によっては、「最終学歴」を選択する割合が低下するという事実から、「就職」という経験は、その結果によっては過去の意味づけを変容させる人生の転機となっているという記憶の現在性・社会性(cf: M. Halbwahcs)との関連を明らかにした点である。補足するならば、①の点からは、「最終学歴」時点におけるキャリア教育の重要性が理解できる。また②の点からは、「正社員」「非正社員」「無職(求職中)」と「専業主婦」「無職(何もしていない)」との間に存在する「労働市場との断絶」という分水嶺による差異が、「専業主婦」を除けば、前者と比較したときに後者は過去を否定的に捉え、現在の問題の原因を過去のある時代の出来事に帰責し、「最終学歴」以外の時代を選択する傾向が高まることから理解できた。だが、いずれの点も新卒一括採用という日本型雇用システムによる人生選択の機会の希少性という問題を浮き彫りにしているように思われる。

次に上述した知見から導かれる「キャリア教育」の課題についてである。第一は、「キャリア教育」が「社会」の変化に対応していかなければならないという点である。本章で分析した自由記述の内容は、回答者が経験してきた様々な過去の出来事の中から選択的に構造化された自己物語(浅野, 2001)として理解できるが、その内容は、今日の就職活動において頻繁に語られる内容——「アルバイト」「サークル」「ボランティア」「ゼミ」などと類似していることは明らかである。であるならば、「求められる人材像」の変化とともに就職活動において説得的に受容される語りの内容が変容していくのに対応して、「キャリア教育」は《キャリア教育》の経験の中から有意味な事柄を引き出していく役割が求められるだろう。そのためには今日流通している「就職」や「職業」という文脈における説得的な語りの形式および内容の歴史的特殊性の把握が重要となると思われる。

この点と関連して第二に、「キャリア教育」と《キャリア教育》とをどのように結び付けていくのかという点である。本章で検討したように学校時代のキャリア教育は授業としての「キャリア教育」のみで成り立つわけではなく、学生の自主的な行動による《キャリア教育》からも成り立っていた。この事実を認識するならば、「キャリア教育」は学生が、①《キャリア教育》を経験する基盤としての役割、②《キャリア教育》の経験の解釈に対する支援を果たしていくことが重要となるだろう。なぜならば、特に「現在の職業生活にもっとも関係のある時代」として「最終学歴」以外を選択した人たちは、「キャリア教育」と《キャリア教育》とを巧みに接合させ、過去を再解釈するのではなく、過去を否定的に捉え、現在の問題を過去に帰責させていたためである。それゆえに、「キャリア教育」を通して彼/彼女らが肯定的に解釈していない《キャリア教育》や認識していない《キャリア教育》を有意味に紡ぎあげていくような支援を行っていくことが「キャリア教育」の課題であると思われる。

第3に学校教育における「キャリア教育」の効果を測定することの困難という問題がある。なぜならば、「キャリア教育」が有益であったかどうかや過去の経験をどのように意味づける

か、あるいは想起するか否かは、想起する回答者の現在の状況に大きく依存してしまうため、「キャリア教育」の効果は、常に不安定かつ不確定な状態に置かれている。さらに回答者の現在の状況は、社会の経済状態とそれに伴う雇用の問題と大きく関連する以上、「個人」的な問題ではなく、「社会」的な問題と通底している。したがって、「個人」の問題としてだけでなく、「社会」の問題とも関連させて「キャリア教育」の在り方を模索していくこと、ならびに「キャリア教育」の困難を学校教育の問題だけではなく「社会」の問題として捉え、その困難と向き合っていくことが肝要となるだろう。

【引用文献】

浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』勁草書房.

Berger, P. L., 1963, *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective*, Doubleday Anchor Books.

(=1995, 水野節夫・村山研一訳『社会学への招待』, 新思索社.)

Halbwachs, M., 1925, *Les Cadres Sociaux de Mémoire*, Paris : P. U. F. (=1992, Coser, L, A, tr., *On Collective Memory*, Chicago : University of Chicago Press.)

———, 1950, *La Mémoire collective*, Paris : P. U. F. (=1989, 小関藤一郎訳, 『集合的記憶』, 行路社.)

高橋正樹・岸野洋久, 2001, 「思い出と持続の置き換わり——ライフイベント分析からの試み」『理論と方法』16(1) : 47-60.

角田隆一, 2004, 「現代若者にとって『最も影響を受けた出来事』とはどのようなものか」、『都市的ライフスタイルの浸透と青年文化の変容に関する社会学的分析』 : 257-273.

第8章 労働行政におけるキャリア教育の推進に向けて

本章では、本報告書の各章の分析結果から、今後のキャリア教育推進に向けて注目される事項を要約し、労働行政におけるキャリア教育推進施策等について若干の示唆を行う。

1. キャリア教育の推進に向けて注目される事項

本調査研究の目的は、若者の職業生活の視点から学校段階のキャリア教育にアプローチし、学校段階のキャリア教育と学校卒業後の就労行動、職業生活との関係について分析することにより、学校卒業後のキャリア形成に効果的なキャリア教育推進の検討を行うことにあった。

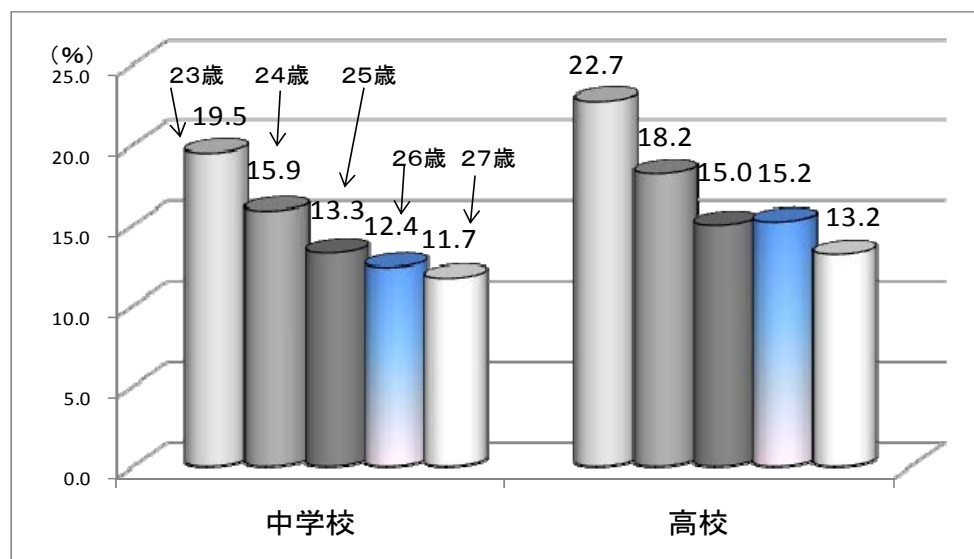
第2～7章の分析により様々な知見が得られたが、学校段階のキャリア教育推進に向けて特に次の事項に注目したい。

(1) キャリア教育の記憶と評価

学校時代におけるキャリア教育についての記憶は、中学校での学習を覚えている（「かなり覚えている」＋「やや覚えている」の合計。以下同じ。）者が31.5%、高校での学習を覚えている者が42.8%、キャリア教育が現在の職業生活に役立っていることについての評価は、中学校での学習が「役立っている（「かなり役立っている」＋「やや役立っている」の合計。以下同じ。）とした者が18.1%、高校での学習は同27.3%であった。

調査対象者は中学校を卒業してから8～12年、高校を卒業してから5～9年経ているが、年齢別にみると中学、高校のキャリア教育ともに、年齢が若いほど覚えているとする割合が有意に高かった。この背景には、キャリア教育を受けてからの年数経過の違いがあることと

図表8-1 年齢別にみた「キャリア教育を覚えている－役立っている」者の割合



(注) 第2章の図表2-5より作成。

ともに、本調査対象者がキャリア教育の発展期に中学・高校時代を過ごした者であることから、年齢が若い者ほど学校でのキャリア教育が発展していったことの影響があると考えられる。

注目したいのは、「覚えている」とする割合と「役立っている」とする割合の差が、年齢が高くなるほど小さくなる傾向があることである（図表8-1）。

「覚えている」と「役立っている」という評価の関係については、キャリア教育が「役立っている」と評価した者の方が評価しない者に比べて、中学、高校のキャリア教育の各内容を記憶している割合が高かった。特に高校のキャリア教育についての両者間の記憶の差は、ほとんどの内容に関してキャリア教育が「役立っている」と評価した者の方が評価しない者に比べて、統計的に有意な水準で高かった（第2章 図表2-19）。

このように、記憶していなければ役立っているとの評価はなされにくいのであり、また記憶している割合とキャリア教育を評価する割合の差が年齢とともに小さくなる事実を勘案するならば、まずは、キャリア教育の内容が職業生活を送るようになってからも記憶に留まるようなものであるか否かが、キャリア教育の有効性の1つの指標となり得るのではないかと考えられる。

そこで、キャリア教育の各内容の記憶うち、「覚えている」との記憶、「役立っている」との評価に影響しているものをみると、キャリア教育について「覚えている」ことに影響を及ぼす内容は、中学、高校共通して「職業興味や職業適性などの検査」（自己理解）、「職業や仕事を調べる授業」、「職業人や地域の人に話を聞く授業」（仕事理解）、「進路の目標や計画を考える授業」（意思決定）の記憶であった。さらに高校では「ボランティアなどの体験活動」（啓発的経験）、「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」の記憶が加わった。

図表8-2 キャリア教育の記憶、評価に影響を及ぼすキャリア教育内容

覚えていることに対して影響のある キャリア教育記憶の内容		役立っているとの評価に影響のある キャリア教育記憶の内容	
中学	高校	中学	高校
職業興味や職業適性などの検査			
職業や仕事を調べる授業			
職業人や地域の人に話を聞く授業			
	ボランティアなどの 体験活動		
		進路に関する個別相談やカウンセリング	
進路の目標や計画を考える授業			
			就職活動の進め方や 試験対策の授業
	コミュニケーションやマナーを学ぶ授業		

（注）第2章の図表2-21から、1%水準で有意なものを記載した。

これらのうち、中学では「職業人や地域の人に話を聞く授業」（仕事理解）の記憶が、高校では「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」の記憶の影響が一番大きかった。また、キャリア教育が「役立っている」という評価に影響するのは、中学、高校共通して「進路に関する個別相談やカウンセリング」、「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」、高校での「就職活動の進め方や試験対策の授業」の記憶であった。「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」の記憶は、中学、高校のキャリア教育を「役立っている」と評価することに最も大きな影響を与えていた（第2章 図表2-21、図表8-2）。

キャリア・コンサルティング技法等に関する研究会（2001）で示されたキャリア形成の流れの6段階（自己理解、仕事理解、啓発的経験、キャリア選択に係る意思決定、方策の実行、新たな仕事への適応）のうち、キャリア教育を「覚えている」ことに影響を及ぼす内容として、自己理解、仕事理解、啓発的経験、意思決定に関連する内容が見出され、キャリア教育を受ける者の記憶の面からも、具体的な就職活動（方策の実行）前の自己理解、仕事理解、啓発的経験、意思決定に係る各学習の重要性が確認できる。それとともに、長く記憶に留まり後に役立ったとされるように、これらの内容をいかに実施するかが課題となる。

また後に「役立っている」と評価されることに及ぼす影響が大きい内容は、「進路に関する個別相談やカウンセリング」、「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」、「就職活動の進め方や試験対策の授業」のように進路選択の意思決定やそれを実行するためのノウハウ等に直接関係するキャリア教育の記憶であった。進路選択、就職活動に関する相談指導について、記憶に残るよう具体的にきめ細かく実施することの必要性を改めて示す結果となった。また、キーコンピテンシーとして指摘されることの多いコミュニケーション能力や社会人としてのマナーの重要性が、キャリア教育を受ける者からも指摘されたと言える。

さらに、最終学歴に近い学校種に通っているときに将来の進路や職業について最も学習したとする傾向が強かったことも注目される（第2章 図表2-20）。これは、高卒者では大学・短大・高等専門学校卒業者に比べて、中学の「職業興味や職業適性などの検査」、「職場体験学習やインターンシップ」、高校の「職業興味や職業適性などの検査」、「職業や仕事を調べる授業」、「職業人や地域の人に仕事の話聞く授業」、「労働法（働くことに関する法律）に関する授業」を覚えている者の割合が有意に高く（第3章 図表3-2）、高校中退者では中学の「コミュニケーションやマナーを学ぶ授業」、「労働法（働くことに関する法律）に関する授業」を覚えている者の割合が高卒以上の者に比べて有意に高い（第6章 図表6-10）という、学歴別にみた各学校段階のキャリア教育内容の記憶の面からも裏付けることができる。もちろん、キャリア教育は「小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」（中央教育審議会答申（1999））が、最終学歴直近の学校段階におけるキャリア教育は、総仕上げとしての意義が大きい。キャリア教育を受ける最後のチャンスとなる学校段階で最も学習しているからこそ、各内容が記憶に残りやすいのであり、その重要性を再認識する必要があると言えよう。

(2)現在の職業生活とキャリア教育

(労働市場における困難経験とキャリア教育に関する認識)

本調査結果からは、現在の職業生活と学校段階のキャリア教育の記憶及び役立っているとの評価の間には、学校卒業時における就職活動に成功し、「直線的」なキャリアを歩んだ者ほど、キャリア教育の記憶があり、役立っているとの評価が高いという興味深い結果が得られた。

具体的には、就職活動をした者の方が、就職活動をしなかった者より中学、高校のキャリア教育を「覚えている」、「役立っている」と回答し、就職活動をした者の中では第一希望に就職した者で、中学、高校のキャリア教育を「覚えている」、「役立っている」と回答する割合が一番高かった(第6章 図表6-7)。また、労働市場への参入時の就業状況及び参入後のキャリアの状況別にキャリア教育の記憶と評価をみると、学校卒業直後の就業形態が正社員・正職員の者は非正社員・非正規職員に比べて、転職経験のない者は転職経験のない者に比べて、中学、高校のキャリア教育を「覚えている」、「役立っている」と回答した割合が高かった(第3章 図表3-3、図表3-11)。さらに非正社員期間が短い者ほど、中学、高校のキャリア教育を「覚えている」、「役立っている」と回答し(第3章 図表3-7)、現在の収入が高い者ほど、中学、高校のキャリア教育を「覚えている」、「役立っている」と回答する傾向があった(第4章 図表4-5、図表4-6)。

これらをもって、キャリア教育をキャリア形成に活かせていない者が、労働市場で困難な体験をしていると結論づけるのは早計に過ぎよう。有業者のうち前職あり(転職経験者)の者の占める割合は、2007年の就業構造基本統計調査によれば、48.2%(5年前に比べ0.5%ポイント上昇)を占め、長いキャリアの中で、多くの者が離転職を経験している現況にある。このような状況において、就職活動をしなくても学校卒業後希望のところに就職できなかった、あるいは転職を経験したという、キャリア形成上の困難さを経験した者において、キャリア教育を記憶している割合が低く、評価も高くないことは、むしろキャリア教育の反省材料として捉える必要があるのではなかろうか。

一方で、学校卒業直後に無業または非正規就労であった者、転職経験がある者、非正規就労の経験がある者であってキャリア教育が「かなり役立っている」と評価した者においては、現在の収入が1ヶ月15万円以上である割合が、「やや役立っている」以下の評価をした者に比べて相当程度高かった(第4章 図表4-20~22)。このように、「直線的」なキャリアを歩まなかったもののキャリア教育を「かなり役立っている」と高く評価する者では、一定の収入を得られていることから、キャリア教育は、労働市場において困難を経験した者に対しても確かな影響を与えていると考えられる。

1999年の中央教育審議会の答申においてキャリア教育が「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と明記された後、2008年の中央教育審議会の答申において

は、「将来子どもたちが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応」するために「キャリア教育を充実する必要がある」とされた。下村（2009）が指摘するように「何か決まり切った一本道をいかに選ぶかではなく、より根本的に、自分が進む道をいかに切り開くかが重要」なのであり、キャリア教育の目的は、環境変化の中でキャリアを形成していく力を身につけることにあると言える。キャリア教育とは、労働市場において遭遇する様々な困難局面においても、キャリアを形成していくための基礎となる力を育み培う教育であり、労働市場において困難を経験した者においても、キャリア教育の内容が記憶されており、後に役立ったと評価されることが期待されるものである。

（就労意識や学校時代の生活とキャリア教育に関する認識）

職業生活や人生に対する考え方等の視点からキャリア教育に関する認識をみると、中学、高校のキャリア教育を「覚えている」程度が高い者ほど、また中学、高校のキャリア教育が「役立っている」と評価する程度が高い者ほど、現在、過去の職業生活への満足感が高く、将来の目標が明確であるとともに、自尊心が高かった。「（これまでの人生は）努力によって決まってきた」とする考えについても、中学、高校のキャリア教育を覚えている程度が高い者ほど、また高校のキャリア教育が役立っていると評価する程度が高い者ほど、賛同していた（第5章 図表5-1）。

現在の就労意識とキャリア教育に関する評価の関連モデルをみると、高校のキャリア教育が「役立っている」との評価が職業生活に対する満足感、生活全般に対する満足感、将来の目標等の明確さに正の影響を与えており、中学のキャリア教育を「覚えている」ことが将来の目標等の明確さに正の影響を与えていた（第5章 図表5-14）。職業生活や生活全般、将来の目標設定に対するキャリア教育の正の影響の構図が明らかになった。

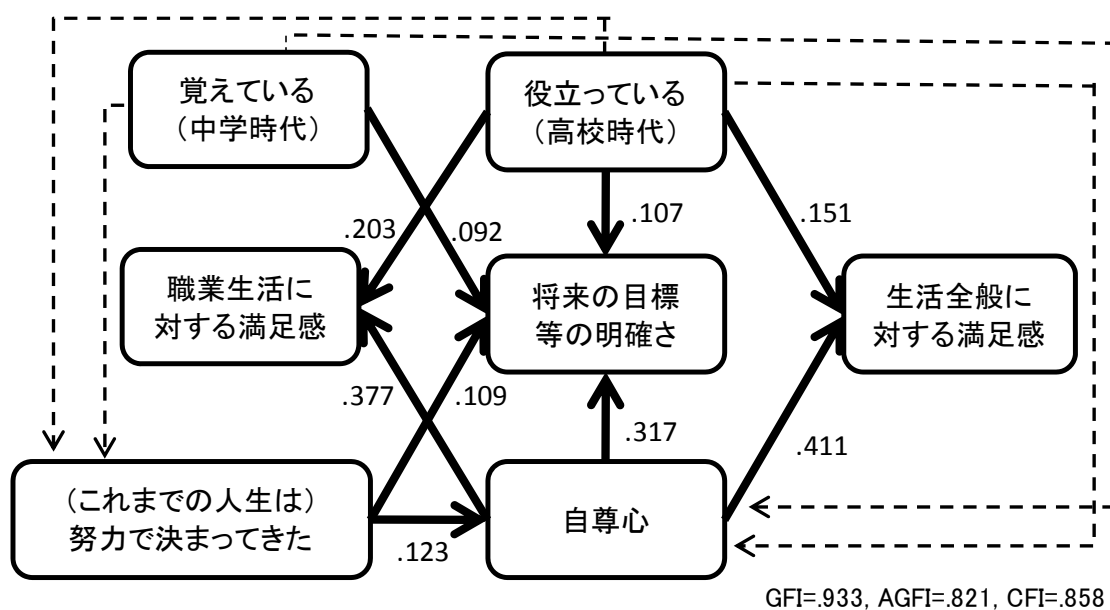
一方、第6章でみたように、学校時代の学校生活とキャリア教育に関する認識の関係については、総じて、キャリア教育が役に立っていると肯定的に評価する者の方が、学校に適応的であり、学校生活をポジティブに送ったと回答していた（第6章 図表6-1）。また、中学時代の成績が「下のほう」の者では、特にキャリア教育に対する評価が低くなった（第6章 図表6-5）。さらに、キャリア教育に対する評価が低い者ほど、学校時代に学んだ知識が今の仕事に役立っていると評価する者の割合が低かった（第6章 図表6-11）。このように、学校生活に適応し積極的に学校生活を送ることができなかつた者、成績が下位であった者からは、学校時代のキャリア教育について良い評価が得られない傾向があり、キャリア教育に対する評価が低い者ほど学校時代に学んだ知識が仕事に役立っていると考えられていないことは重く受け止める必要がある。

しかしながらこれらの結果は、逆にキャリア教育による新たな体験や刺激が、学校生活を積極的に送る方向に機能した場合、学校生活や職業生活に好影響をもたらす可能性を示していると考えられることもできる。

加えて、先の関連モデル図で注目されるのは、職業生活に対する満足感、生活全般に対する満足感、将来の目標等の明確さに与える自尊心の正の影響の大きさと、自尊心が「(これまでの人生は)努力できまってきた」という考え方に正の影響を受けていることである。

自尊心と中学、高校のキャリア教育の記憶及び中学、高校のキャリア教育が役立っているとの評価の間、「(これまでの人生は)努力によって決まってきた」という考え方と中学、高校のキャリア教育の記憶、高校のキャリア教育が役立っているとの評価との間には、各々1%の水準で有意な相関が見出されている(第5章 図表5-1)。全体としては自尊心が低い非正規就労者においても、キャリア教育が「かなり役立っている」との認識を持っている者では、自尊心は高いとの結果も見出された(第5章 図表5-7)。これらのことは、先のモデル図が図表8-3のように発展することにより、キャリア教育が自尊心や人生に対する考え方に影響を与える可能性を示唆していると考えられる。

図表8-3 キャリア教育の記憶、評価と現在の就労意識等への評価の関連モデルの発展



(注) 第5章の図表5-14に加筆。

キャリア教育がこのような機能すれば、自尊心を高める効果をもたらし、職業生活及び生活全体に対する満足感、将来に対する明確な目標の設定に二重の好影響を及ぼすものとなる。

キャリア教育が、職業の実態や職業生活への理解、進路選択の決定を促すことに留まらず、教科の勉強や学校生活を積極的に送ることへ影響を与え、努力することを促すとともに自尊心を高めるような内容となることの重要性を指摘しておきたい。

例えば下村(2009)は、「アメリカの職場体験学習では、いかに学校の勉強が大切にされているかを教えることも、大きな目的のひとつ」と指摘し、キャリア教育から教科の勉強への循環の視点を示している。キャリア教育により将来のキャリアを考え、それが今なすべき

ことを考え、積極的な学校生活を送ることにつながるという、好循環が形成されることが期待される。

また矢野（2009）は、大学工学部出身者を対象とした教育効果の分析から、「学び習慣は、大学教育に熱心に取り組むことによって培われている」こと、「卒業時の知識能力は、直接的に所得の上昇に結びついていない」こと（むしろ小さいながらマイナスの効果）を指摘し、学校時代に学びの習慣を身につけ、卒業後もそれを継続することによる職業生活での知識の獲得により所得が上昇することから、「学習は、継続し、維持することによって、力を発揮する。」と職業生活へと続いていく「学び習慣」の重要性を指摘した。キャリア教育は、この「学び習慣」を教科とは違う側面から刺激することができるのではないかと考えられる。

キャリア教育はすべての学生・生徒に必要なことは言うまでもないが、キャリア教育を最も必要としているのは、実は学校生活への適応が困難であったり、成績がふるわなかったりして、将来の見通しが持てないでいる若者たちである。しかしながらキャリア教育に対する認識は、学校生活の送り方や教科の成績等と独立してある訳ではないという現実が本調査から明確になった。当然、キャリア教育の基礎としての教科学習、学校生活の充実の重要性が指摘される場所であるが、一方キャリア教育には、すべての学生・生徒に、教科の勉強とは違う側面から学びへの刺激を与えることができる可能性を内在している。

その可能性を現実のものとする方策の一つとして、教育振興基本計画（2008）等において提示されている、学校外の多様な資源との連携による教育支援を一層有効に機能させることがあると考えられる。第7章の自由記述の分析からは、学校内外の経験の広がりの中で職業生活と結びつく社会的なルールやキャリア形成意識等を体得していることが示されたが、キャリア教育は、学生・生徒のキャリアに関連するこのような自主的な行動の基盤となる。併せてキャリア教育においては、学生・生徒のキャリアに関連する自主的な行動や体験の中からキャリア形成の力を引き出し、統合し、高めるとともに、キャリアに関連する自主的な行動が少ない者に対しては、体験を補填する役割も担う必要がある。このようなキャリア教育を推進するに当たっては、教育行政と労働行政等の関係行政が緊密に連携する中で、学校内の資源だけでなく学校外の資源も有効に活用して、多角的な視点から実施することが効果的と考えられる。これにより、キャリア教育から教科や学校生活の適応への好循環が促進されることも期待したい。

2. 労働行政の担うキャリア教育推進施策への示唆

(1) 労働行政におけるキャリア教育推進の意義

労働行政においてキャリア教育を推進する意義について、キャリア・コンサルティング研究会（2010）は、「川上対策としての失業、フリーター・ニート状態の発生・長期化の未然防止」を指摘する。矢野（2009）の言うように、「キャリア教育の関心は、変化する産業社会における就業可能性にある」ことから、将来の労働市場における失業等の長期化を未然に防止

するため、労働行政がその得意とする分野からキャリア教育に貢献することは重要であり、必然のことであると言える。

このため労働行政においては、従来から公共職業安定所と学校との連携により職業指導を推進してきたが、「キャリア教育に資し得る資源」としてのキャリア・コンサルティング機能についても、キャリア・コンサルタント5万人計画の達成やキャリア・コンサルティング技能検定制度の導入等により、量と質の量側面から整いつつある。

キャリア・コンサルティング研究会（2009）は、「教育機関は、・・・（中略）・・・本人の適性や生活環境等について最も把握し得る立場で、本人のやる気・意欲を喚起し、能力や適性に気づかせるようなキャリア教育プログラムを提供することが望まれる。その際には、労働市場、企業の視点も導入した上で、プログラムを実施し、その効果について評価することが重要である。」とキャリア教育プログラムにおける労働の観点の重要性を指摘した。労働市場や企業の視点に関する専門性を有するのは労働関係機関（者）であり、教育機関と労働関係機関（者）との適切な役割分担と連携により、前節で指摘した、学校生活・教科－キャリア教育との好循環がもたらされ得ると考えられる。

本調査結果に基づき、教育機関と労働関係機関（者）の役割分担と連携に関する具体的な内容としては、次項のようなものが考えられる。

(2)労働行政の特徴を生かしたキャリア教育の推進

(自己理解促進について－職業適性検査等の活用)

本調査研究結果によれば、職業に関する自己理解を促進するための職業興味や職業適性などの検査の経験は、中学、高校ともにキャリア教育全体を覚えていることに対して大きな影響をもたらしていた。また、高校時代のキャリア教育が役立っていると回答した者においては、キャリア教育が役立っていないと回答した者に比べて、職業に関する自己理解を促進するための職業興味や職業適性などの検査の経験を覚えている割合が有意に高かった。教科のテストとも知能検査とも違う、これら職業適性検査等の体験は、中・高生にとって新鮮な体験であったことが推測される。

この新鮮な体験をキャリア形成の意欲喚起へとつなげていくことが重要である。

労働行政においては、厚生労働省編一般職業適性検査、職業レディネス・テストを学校に提供しているところであるが、これらの職業適性検査等をキャリア形成に対する意欲の喚起と促進につなげるためには、教育行政との連携を一層密にし、キャリア教育に活用できる検査等情報を提供するとともに、必要に応じ、学校の教員等が検査の意味を理解し、結果を正しく解釈して学生・生徒にフィードバックすることができるような支援を行うことにより、学校における検査実施前、後の学習の充実に貢献することが必要である。

職業適性検査等や職業ガイダンスツールを研究開発している(独)労働政策研究・研修機構としても、学校での活用も意識した研究を行い、成果や情報を提供することにより、キャリ

ア教育の推進に一層貢献する必要がある。

(仕事調べによる仕事理解について—地域の实情に即した職業情報の収集と提供)

本調査研究結果によれば、職業や仕事を調べる授業についても、中学、高校ともにキャリア教育全体を覚えていることに対して大きな影響をもたらしていた。さらに高校時代のキャリア教育が役立っていると回答した者においては、キャリア教育が役立っていないと回答した者に比べて、職業や仕事を調べる授業を覚えている割合が有意に高かったところである。

職業や仕事の情報については、まずは各職業に関する標準的な内容が提供される必要があるが、これに加えて、居住する地域にある職業や労働市場情報が提供されることにより、学生・生徒が、職業を現実のものとしてより身近にとらえることができるようになり、生きた知識として記憶に留まるようになると考えられる。

地域の職業、労働市場に関する情報に最も詳しいのは、地域の労働行政機関である。このため、公共職業安定所等の労働行政機関においては、地域の労働事情や職業情報を学生・生徒にわかりやすく加工・編集して提供することが肝要である。これら情報の提供は、労働行政において実施されている高校生に対する職業ガイダンスをはじめとして、労働行政機関と学校の教員等との様々な連携機会を通じて積極的に行うことが望まれる。

(職業の世界に接することによる仕事理解と啓発的体験について—学校生活の充実へと循環するような職業人の講話や職場体験等)

本調査研究結果から、職業人や地域の人のお話を聞く授業については、中学、高校のキャリア教育を覚えていることに対する影響が大きく、また役立っていると認識にも大きな影響を及ぼしていることが分かった。現在、労働行政においては、企業で働く者などを講師として中学、高校等に派遣することにより、職業や産業の実態、働くことの意義、職業生活等に関する理解と生徒自ら考えることを促進するためのキャリア探索プログラム、高校生を対象としたジュニア・インターンシップが行われている(第1章 図表1-3)。職業人の講話や職場体験等は、学生・生徒が職業の世界に直に接することができる数少ない機会である。特に中・高卒者にとって中学・高校時代のキャリア教育が重要であることは、本調査結果から明らかになったところであり、中高生を対象とした職業人の職業講話や職場体験は、地域労働情勢に関する専門機関であり、企業との接触機会が豊富な労働行政の一層の貢献が望まれるキャリア教育分野である。

その際、矢野(2009)の言う「学習の継続」や、亀山(2009)の指摘する「職業キャリアにとどまらない、生活全般にかかるライフ・キャリアを視野に入れた包括的能力育成」の観点に加わることが望まれる。職業人の職業講話や職場体験は、学校からの連続過程の中でどのように職業キャリアと人生キャリアを築いていくのかを事実として伝えることができる。この事実が、キャリア教育から学校生活や教科の勉強へ、さらにキャリア形成へという好循環

環を促すと考えられる。このような循環が生まれるよう、労働行政においては、学びの連続としての職業及び人生キャリアの形成が銘記されるよう効果的なプログラムを工夫し、実施後のフォローアップを行う等、積極的な取り組みが期待される。

(意思決定支援について—キャリア・コンサルティングの充実等)

教育機関領域におけるキャリア・コンサルティングについては、キャリア・コンサルティング研究会報告(2010)において、「多くのキャリア・コンサルタントにとって、中学校、高等学校のキャリア教育は、量的にも質的にもいわばフロンティア、これからの本格的活動が期待される領域と言えるものである。」との指摘がなされたところである。

本調査研究結果をみると、「進路に関する個別相談やカウンセリング」の記憶は、中学、高校のキャリア教育が役立っているとの評価に影響を及ぼしていた。1対1できめ細かな支援を行うことのできる個別相談やカウンセリングの重要性が本調査結果からも再確認されたと言える。また様々なキャリア教育のメニューの中で、特にキャリア・コンサルティングは、キャリア形成に大きな影響を及ぼすことが本調査結果から明らかになった自尊心を高めるよう、学生・生徒を直接支援することができると考えられる。

このように個別相談やカウンセリングの影響力と重要性は大きいですが、1対1で行うが故に、相談やカウンセリングを担う人材の力量が非常に重要である。キャリア・コンサルティング能力については、技能検定制度がそれを担保するものとなるが、さらに教育機関領域における実践力を鍛えることができるよう、キャリア・コンサルタント個人及び関係団体の研さんを支援することが望まれる。

さらに労働行政においては本年度、蓄積されてきたキャリア・コンサルティングの専門性を活かして高校教員、キャリア・コンサルタント、その他学校内外でキャリア教育に関わる人材を対象として、キャリア・コンサルティングの理念・手法を活用し、学校現場におけるキャリア形成支援を担う人材を育成するキャリア教育専門人材養成事業(第1章 図表1-3)が開始される。本調査結果から、キャリア教育において様々な局面に遭遇する中でキャリアを形成していく力を培うものであるという視点の重要性を強調してきたところであり、当該事業が学校に適応が困難であったり、成績がふるわない者を含め、すべての学生・生徒に対して、職業や人生に対する取り組み姿勢や学校の教科学習に対する好影響を与え、努力を促すとともに自尊心を高めることができるようなキャリア教育の企画・運用ができる人材の育成につながることを期待される。

(方策の実行支援について—具体的な就職活動ノウハウの提供)

就職活動を具体的に進める方策の実行に関する内容は、キャリア教育の最終段階となる。キャリア教育内容の記憶を学校段階別にみると、大学等での「履歴書の書き方や面接試験の練習」、「就職活動の進め方や試験対策の授業」は、半数近い者が記憶していた。また、「就職

活動の進め方や試験対策の授業」は、高校のキャリア教育が「役立っている」という評価に対して影響を及ぼす内容であった。

このように、就職活動に直結するキャリア教育の内容が記憶に残り役立つとの評価に影響を及ぼすことから、企業との接点が多い労働行政機関における就職活動支援に係るノウハウを積極的に学校に提供していくことは、キャリア教育の効果を高めるためにも必要であると言える。

短大、大学においては、設置基準が改正されたことにより、2011年から「大学（短期大学）内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整える」こととなった。労働行政においては、高校生に対する就職ガイダンスとして、就職活動の進め方等の説明がなされているところであるが、大学等におけるキャリア教育の推進に資するために、就職活動の進め方や履歴書作成といった分野において、公共職業安定所における職業相談等で培われたノウハウを整理し大学等へ提供していくことも検討されてよいと考えられる。

以上、キャリア形成の段階別に、本調査研究で得られた知見をもとに、労働行政の特徴を生かしたキャリア教育推進や貢献の在り方について検討した。

併せて、学校時代のキャリア教育から十分学べなかった者については、労働行政におけるキャリア形成支援が非常に重要な意味を持つことを本報告で重ねて指摘したことを付記しておきたい。学校時代のキャリア教育から十分学べなかった者に対する支援として、キャリア・コンサルティングや職業理解、自己理解等に関するガイダンスやセミナー、ジョブカードを活用した職業能力開発などのきめ細かなキャリア形成支援メニューが労働行政において常に用意され、充実されていくことが必要である。

小、中、高校の学習指導要領及び大学、短大設置基準の改正により、各学校段階でキャリア教育が本格的に推進される時代を迎えた。キャリア教育本格化時代においてキャリア教育を効果的に推進するためには、職業生活に対する影響や効果の検証という長期的な視点が求められる。本調査研究はそれに応えるために、職業生活とキャリア教育の関係にアプローチした初期的な研究であり、本研究で得られた知見は、学校から職業への円滑な移行を支援するために、労働行政をはじめキャリア教育関係行政共通の検討材料として提供したい。

キャリア教育が職業生活に及ぼす長期的な効果をより深く検討するためには、実際に行われているキャリア教育の内容に関する詳細な分析や調査対象者の年齢の拡大、学校卒業後のフォローアップ等課題は多い。今後とも、労働の視点からキャリア教育をとらえた調査研究を深め、キャリア形成支援の充実・発展に貢献していきたいと考えている。

【引用文献】

- 亀山俊朗 2009 キャリア教育からシティズンシップ教育へ？ 日本労働研究雑誌 No.583
（独）労働政策研究・研修機構 92-104
- キャリア・コンサルティング技法等に関する研究会 2001 キャリア・コンサルティング 技法等に関する調査研究報告書
- キャリア・コンサルティング研究会 2009 「キャリア・コンサルティング」研究会報告書
中央職業能力開発協会
- キャリア・コンサルティング研究会 2010 「キャリア・コンサルティング」研究会報告書
中央職業能力開発協会
- 下村英雄 2009 キャリア教育の心理学 東海教育研究所
- 矢野眞和 2009 教育と労働と社会 日本労働研究雑誌 No.588 （独）労働政策研究・研修
機構 5-15